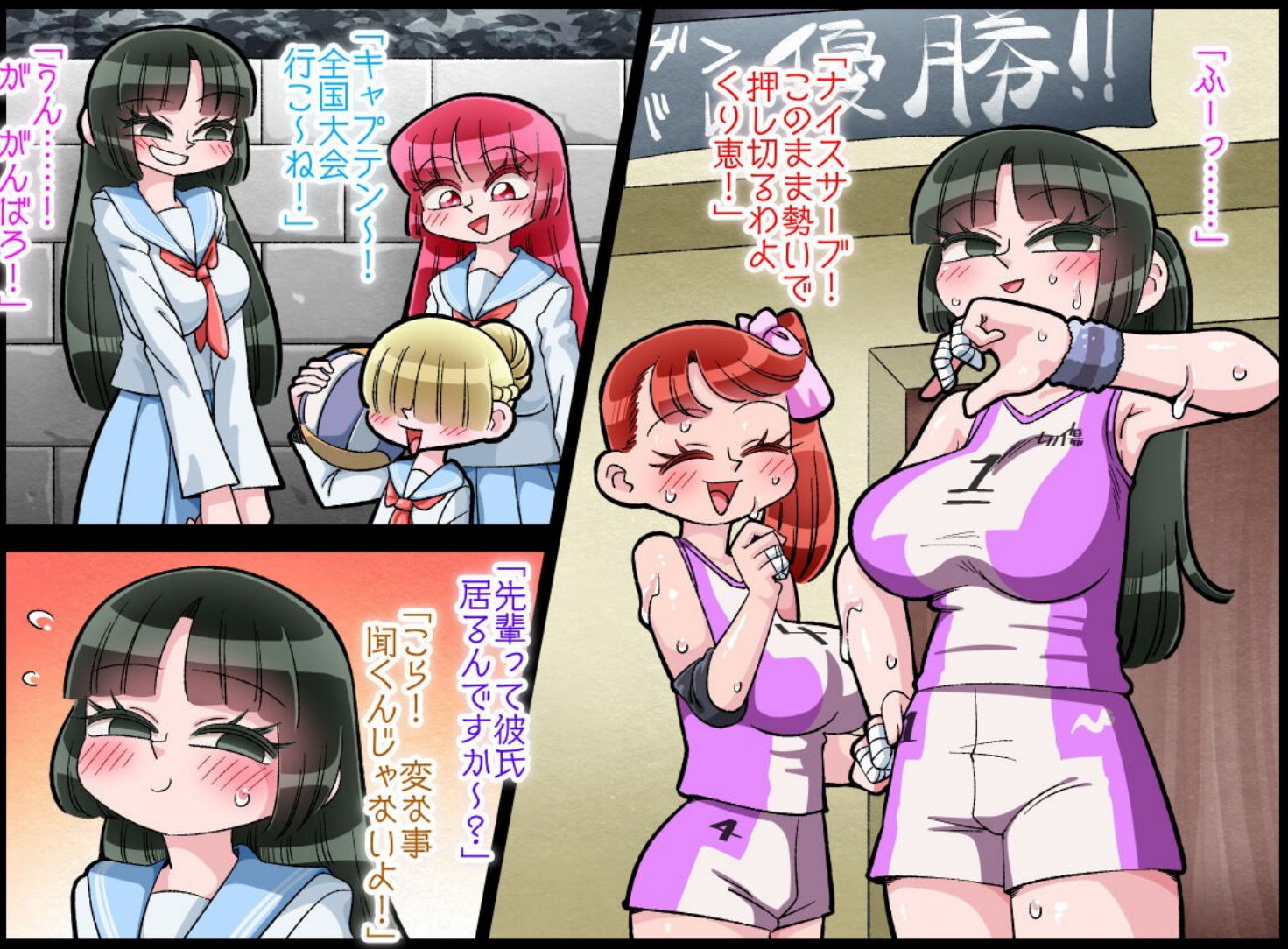

作 切傷甲
くり恵から笑顔が消え、
そして戻った理由（ワケ）


「ふーっ……」
「ナイスサーブ！このまま勢いで押し切るわよくり恵！」
「キャプテン～！全国大会行こ～ね！」
「うん……！がんばろー！」
「先輩って彼氏居るんですか～？」
「こら！　変な事聞くんじゃないよ！」


「おいコラ!!生意気に俺を見下ろすんじゃねぇ!!」
「うっ！うぐぅっ!!」
「膜ブチ破りたての処女マンコに中出しするぞ!!」
「んぐぅぅぅ～～～っ!!」


「孕め孕め孕めぇっ!!
知らねぇ男の精子で
受精して人生終われ!!」
「むぐぐぐぐぐっ!!」
ドピュッ
ドピュッ
びゅるるっ!!
学生証
氏名
誕生日
入学日
「くり恵ちゃんねぇ……
クリトリスみてぇな
エロい名前してるじゃねぇか」
「よし 今日からお前は
俺の性奴隷だからな!」
「名前も住所も
全部バレてるんだ
逃げようなんて
思うなよ?」
「あ……
いや……
いやぁ……」
「たすけて……
だれか……」


十年後―
「……」
「!!」
「なつかしいなァ
俺の性奴隷にするって言ったのに
直後に引っ越しやがってよぉ」
「ずっと会いたいと思ってたぜぇ……」
「おい……
お前 くり恵じゃねぇか?」
「やっぱり
そうだ!
くり恵だ!」
「……?」
「ほら お前をレイプした……」
「あの時の男だよ!」
「忘れちまったか?
まぁ仕方がねぇか
俺もだいぶ落ちぶれたからなぁ……」
トスン


「そうそうコレだよコレ！」
「このデッケェパイオツを揉みたくてたまらなかったんだよ！」
「……」
「十年の間に勝手に人妻になりやがって……」
「夫はあの事を知ってんのか？」
もみ
もみ
「！」
「言ってねぇんだろ？」
「言えるワケねぇよなァ処女をこんな奴に捧げたなんて……」
ぷにん
むにゅ
ずるんっ!!
「バラされたくなけりゃ判ってるよな……？」
「旦那の事を愛してるんだろ？嫌われたくねぇよなァ……？」
すりすり


「十年経っても相変わらず良い身体してるじゃねぇか」
「ホラ　とっとと尻を突き出しやがれあの日の続きをするんだよ！」
「オイオイお前は背が高いんだから腰を屈めなきゃ入れられねぇだろ」
「チンポ突っ込めるように腰を落とせ！」
「そうそうそうやって穴の位置を合わせるんだよ」
「……」
「あ～……たまんねぇなァ……！ネットリしてて程よくキツくてエロいマンコだぜ！」
ぬぷぷぷぅ
プル
プル
プル

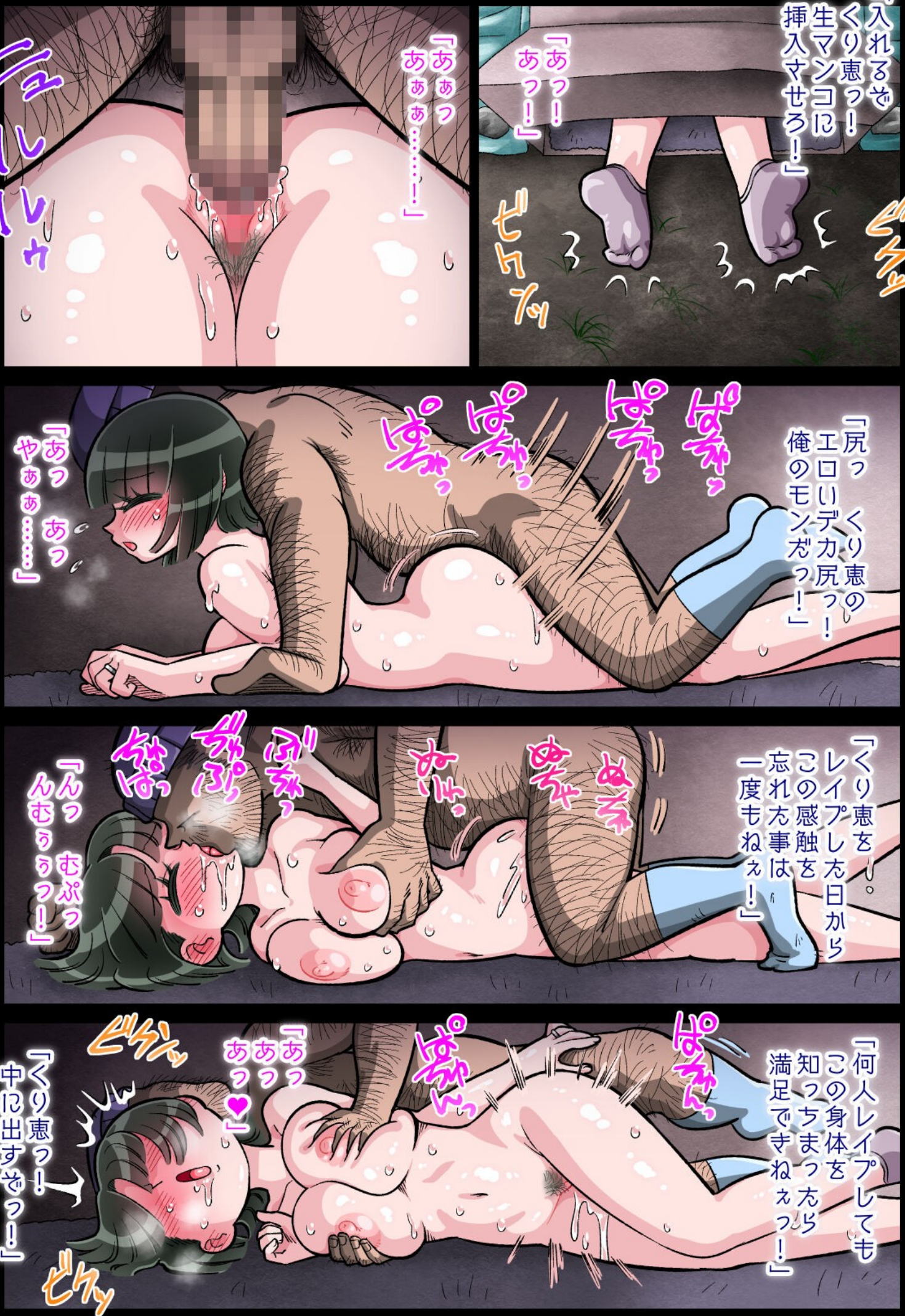

「うっ……うぅ……」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「色んな女をレイプしたがやっぱりくり恵が一番良いぜ！」
「はぁっ……はぁっ……」
プルン
ぷるっ
ぬちっ
「人妻にしちゃだいぶキツいがマてはは旦那のチンポが短小だな？」
「あっ！いやっ！」
もみっ
もみっ
ぬちゃ
「こんな所まで届いた事ねぇんだろ？マンコの形でバレバレだぜ？」
「あっ……うっ……」
「毎晩ちゃんと旦那に喜ばせてもらってんのか？」
もみん
むぎゅっ
むぎゅっ
「こんな良い身体を持て余してちゃいけねぇなァ」
「や　やめて……」
「今日から俺がくり恵を女にしてやるぜェ」
「ザーメンを中にぶちまけて子宮を温めてやるからよぉ！」
ぬるっ
ぬっちゃ
にゅ


「いやっ……！
いやぁぁ……!!」
「くり恵っ!!
今度こそ逃さねぇ!!
性奴隷になりやがれェ!!」
「あぁぁ……
うぅ　うぅ……」
「うおおっ……
くり恵っ　くり恵ぇっ!!」
プル
プル
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
びくっ
びくっ
びくっ
「昔のレイプも
今日の不貞行為も
バラされたくなけりゃ
……判ってんな？」
「どうだ　再会を祝した
濃厚種付けのお味はよォ」
「は～～っ……
は～～っ……」
「うぅ……
せ　性奴隷に
な　なります……」
ドロ～…
ニュポン


ごめん
今日も帰れない…
料理仕舞っておいて
20:37
りょーかい!
20:45 既読
「はー……」
ビー
チラ
「時間通りだな
来てくれて
うれしいぜ」
「……」
「俺と十年ぶりに
セックスしてから
どうしてた?」
「思い出して
ワレメこすり回して
たんじゃねぇか?」
「今夜は俺の
マイホームで思う存分
楽しませてやるぜ」
「何ぼヤっと立ってんだ
早く素っ裸になるんだよ」
「……」
すりり
「おっ パンティが丸見えに
なった瞬間にエロいニオイ
漂ってきたぜ」
「こりゃマンコも
出来上がってる
やがるな?」


「やっぱりトロトロになってやがったなァ」
ぴちゃ
ぬぢゃ
ちゃぴ
ちゃぴ
「うっ あっ あぅっ……」
「ビッショリ濡れたエロマンコがチンポからザーメン搾り取る動きしてるぜぇ！」
「おらっ 潮吹け！敏感マンコ痙攣させながらエロ汁吹き出せ！」
「い いやっ…… やだっ やっ……」
びくんっ
「あぁぁっ！だ だめっ だめぇっ！」
「へへ 勃起が止まらねぇよ 今度は俺が楽しませてもらう番だな……？」
「はぁ はぁ はぁ……」
イヤァアア!!
しゃぁあ〜

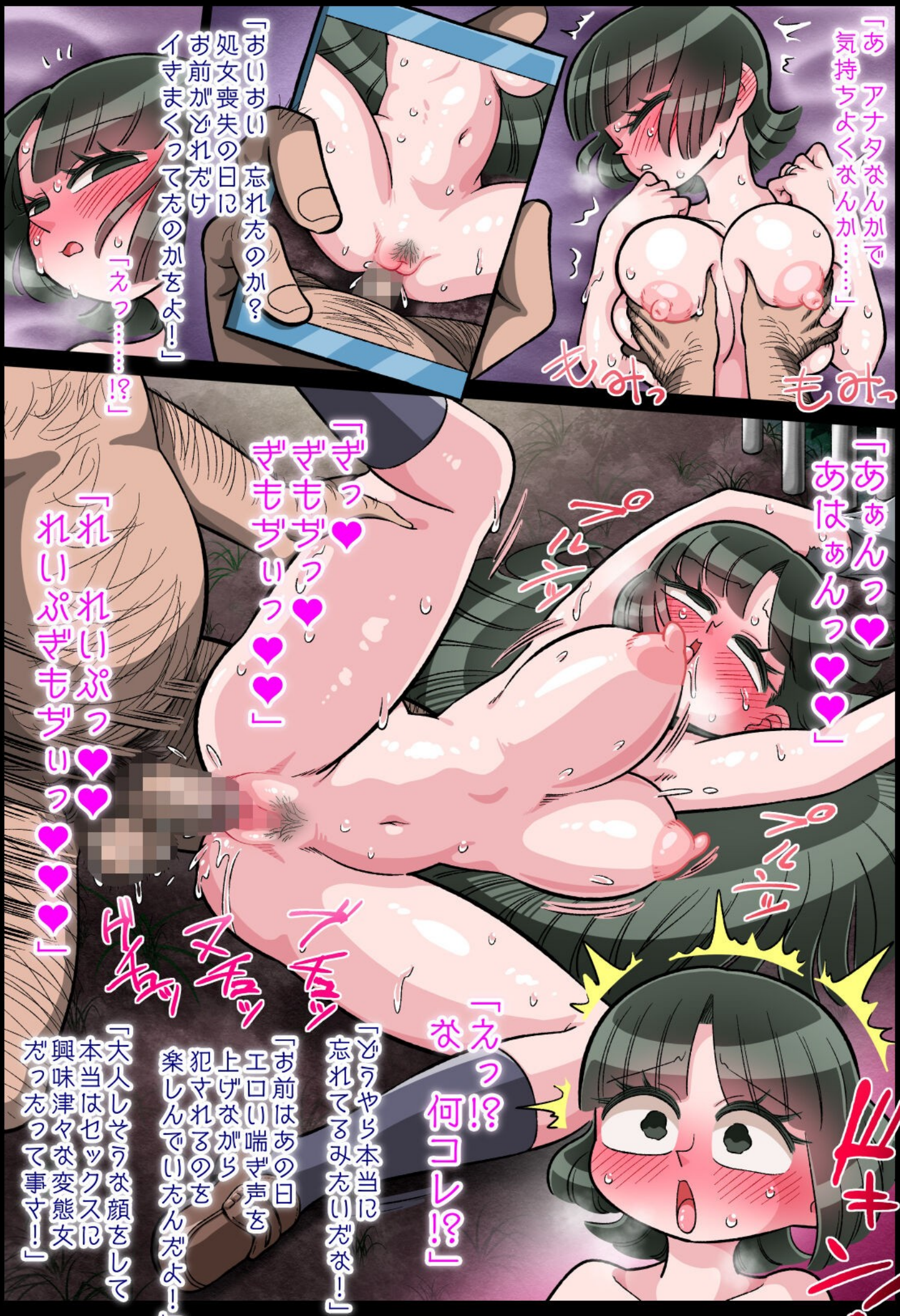

「とっとと中に入りやがれ！案外気に入るかもしれねぇだろ？」
「うぅ……」
「ちょっと小せえからくり恵だと足がはみ出るかもしれねぇけど……まぁ気にすんな！」
「うっ……！くっ臭い……！」
「くり恵ちゃぁ～ん！俺の愛の巣へようこそぉ！」
「やっやだっ……！狭いい……！」
モゾ モゾ
「んうぅっ……！んぷっ うぅっ！」
ブチュッ
ヂュルッ
ブチュッ
「くり恵っ！くり恵ぇっ！お前は俺の女だっ！一生俺の物なんだよっ！」
めりっ
にゅるっ
「あぅっはぅぅ……！」


「入れるぞ
くり恵っ！
生マンコに
挿入ヤせろ！」
「あっ！
あっ！」
ビクッ
ビクンッ
「あぁっ
あぁぁ……！」
ニュルルゥ
「尻っ
くり恵の
エロいデカ尻っ！
俺のモンだっ！」
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
「あっ
あっ
やぁぁ……」
「くり恵を
レイプした日から
この感触を
忘れた事は
一度もねぇ！」
ぬちゃ
ぬちゃ
ぷりっ
ぷりっ
ぷりっ
「んっ
んむぅっ
むぷっ！」
「何人レイプしても
この身体を
知っちまったら
満足できねぇっ！」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「あっ
あっ
あっ♥」
ビクンッ
「くり恵っ！
中に出すぞっ！」
どくっ


「俺に犯されながらイキやがれっ!!」
「あぁっ♥あぁぁあっ♥♥」
ズンズンズン
「あっ……♥あぁっ……♥」
ブルッ
ビュー
ビュッビュッ
どーん!!
「フーッフーッくり恵ぇ……」
メロン♪
「あんっ♥あんっ……♥」
「イっちゃな？俺とのセックスでくり恵はイっちゃんだ」
「はぁっはぁっ違う……違うの……」
「違うだァ!?認めるまで今夜は家に帰すねぇからな!!」
「いやっ!いやめてっ!」
「やだっ!やだぁ……!!いやぁ……!!」


「へぇ ここがくり恵と旦那さんの寝室ねぇ……」
「綺麗な部屋でうらやましいぜ」
「……」
「ワリいな 押しかけちまってでも勃起が収まらなくて我慢が出来なくてよォ」
「お お願い……家には来ないで……主人に知られたら……」
「あなたと会ってる所を誰かに見られたらこ 困るの……」
「なら旦那が帰って来る前に早く済ませちまおうぜ」
「うぅ……」
「あっ……やっ……」
ふにゅん
もみ
「俺の事を旦那だと思ってあのベッドで楽しんでくれよなァ！」


「うぅっ……くぅぅ……」
「どうだ くり恵！俺のチンポでほじくられて気持ち良いだろ？」
「はぁっ……はぁっ……」
「旦那の粗末な物じゃ届かない所までグイグイ突っ込まれて感じてるんだろ？」
「かな 感じてなんか無い……」
「嘘つけ こんなにギュウギュウに締め付けてるのにか？」


「あ アナタなんかで気持ちよくなんか……」
もみっ
もみっ
「おいおい 忘れたのか？処女喪失の日にお前がどれだけイきまくってたのかをよ！」
「えっ……!?」
「あぁんっ♥あはぁんっ♥♥」
プルン
「ぎっ♥ぎもぢっ♥ぎもぢいっ♥♥」
プルン
「れ れいぷっ♥♥れいぷぎもぢいっ♥♥♥」
ヌチッ
ヌチッ
「えっ!? 何コレ!?」
「どうやら本当に忘れてるみたいだな！」
「お前はあの日エロい喘ぎ声を上げながら犯されるのを楽しんでいたんだよ！」
「大人しそうな顔をして本当はセックスに興味津々な変態女だったって事さ！」
ドキン！


ビュルルルッ！
「犯してっ♥♥犯してぇぇっ♥♥♥♥」
「中に出してっ♥♥私を汚してぇっ♥♥♥♥」
「あ…あわ私……そうだ……あの時……私はレイプで喜んで……」
「思い出したか？レイプをおねだりする女なんて初めてだったぜ」
ぶりっ
「もっと……♥もっと犯してください……♥」
「セックス……♥私セックス大好きな変態なんです♥」
ぶりっ
ガクガク
「おっ……♥おぉっ♥んおぉおっ♥♥」
ビクビクビク


「マぁ 喜ばせてやるぜぇ……！」
「あ……♥ あぁ……♥」
「女に産まれた事を心の底から喜ばせてやるよ!!」
「あぁんっ♥♥いやぁんっ♥♥」
「だめっ♥♥だめぇっ♥♥ぎもぢいいっ♥♥♥」
ぱちゅんっ!!
ぱちゅんっ!!
「せ せっくしゅっ♥ せっくしゅぅぅっ♥♥ せっくしゅし たいいいっ♥♥」
「可哀想になぁ！ こんなにセックスが大好きなのに旦那に相手にしてもらえなくて！」
ぱんっ ぱんっ ぱんっ
「んふーーっ♥♥ んふーーっ♥♥ きしゅっ♥ きしゅぅぅっ♥♥」
「くり恵の口の中っ舐め回してやるからな！」
じゅるっ ぶちゅるっ


「もう自分を騙す必要なんてねぇからな！」
「セックス好きとして産まれた事は何も悪い事じゃねぇんだからよ!!」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「ぎもちっ♥ぎもちっ♥ちんぽっ♥ちんぽこっ♥」
ぷるんっ！
ぷるんっ！
「ちんぽこっ♥きんたまっ♥おとこっ♥すきっ♥」
「は、恥ずかしく無いっ？せ、セックス好きなのっ悪いことじゃ、無いっ!?」
たぷっ
たぷっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「悪い事なんかねぇんだよ!!気持ちよくなりてぇんだろ!?」
「な、なりたいっ♥気持ちよくっ♥なりたいっ♥」
にちゃ
ぴちゃ
ぬちゃ
どちゃ


どぱっ どぱっ
どぱぁぁ！
「いやらしいくり恵のコトっ♥♥♥」
プルルッ♥
ぷるんっ♥
ぴゅるるる
「いっぱい気持ちよくしてぇぇぇっ♥♥♥」
ぴゅっ
ぴゅっ
ぴゅっ


「ふーっ♥ ふーっ♥ ちゅぱっ♥ ちゅぱっ♥」
ちゅぱっ
ちゅろっ
ぐちゅる
「ちんぽっ♥ ちんぽぉっ♥」
「ちんぽぉぉっ♥♥ おいしいよぉぉっ♥♥」
どろぉ
「どうだったもう俺とのセックスが嫌だなんて思わないよな？」
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
「セックス……♥ セックス好き……♥」
「可愛いくり恵の為にこれからもたくさんセックスしてやるからな？」
「嬉しい……♥ 嬉しいよぉ……♥」
「そうだ昔のくり恵みたいに髪を伸ばせよその方が可愛いぜ」
「はい……♥ 伸ばします……♥ アナタ好みの女に……なります……♥♥」
ゴポッ

「よぉ　くり恵
今日も色っぽいなァ」

「……」

「これ……
今月の
お金……」

「おう　悪ぃな
いつも助かってるぜ」

「お礼に今日の
ラブホ代は
俺が出してやるよ」

「お金……
ギャンブルにばっか
使わないで……」

スリ
スリ

「わかってるって！
ちゃんと半分は
貯金してるからよォ」

「ちゃんと栄養ある物
食べて……」

くしゃ

「心配してくれんのか？
嬉しいねぇ……！
じゃあ今度　くり恵の
手料理を食べさせてくれよ！」

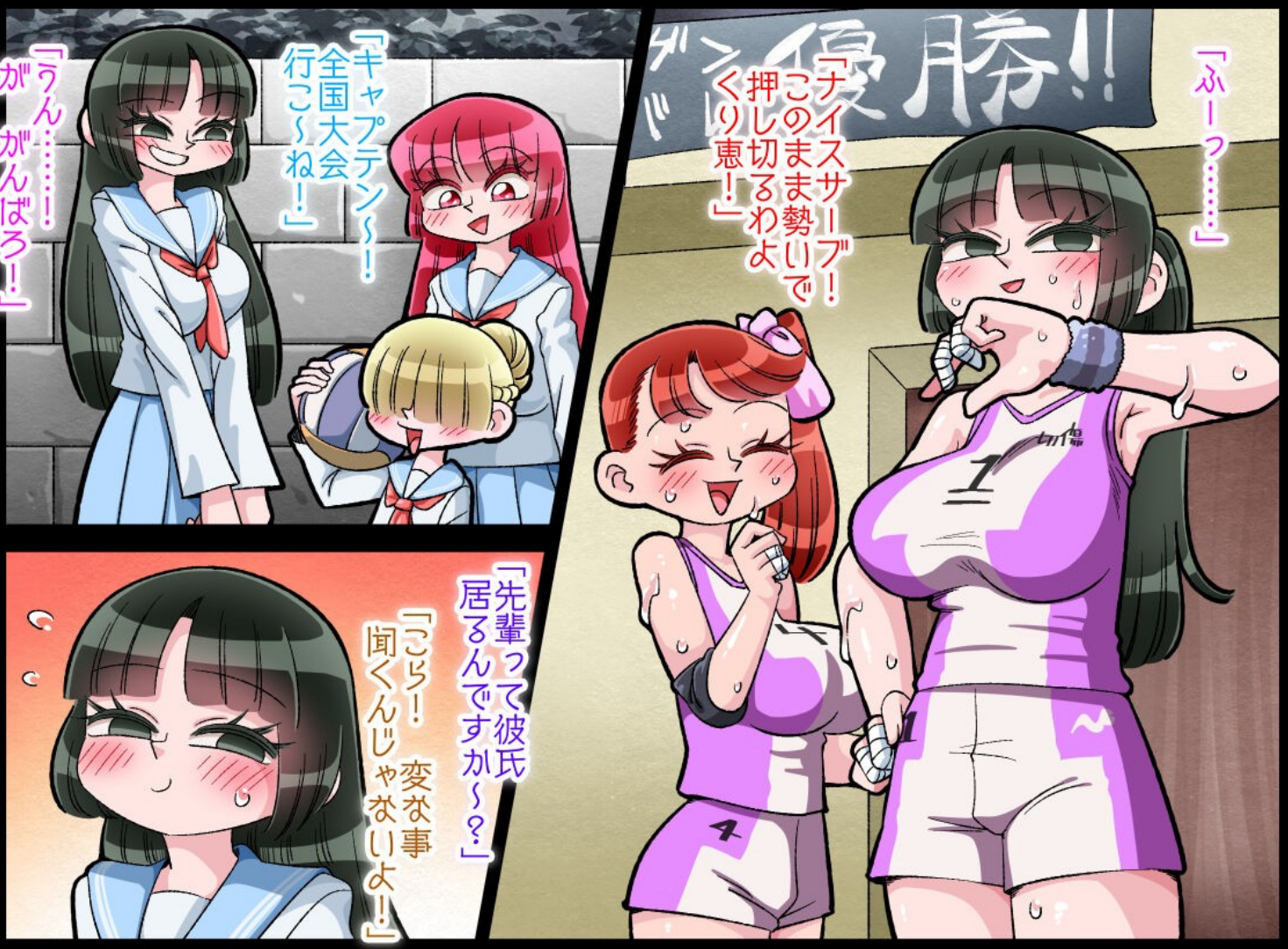
「……
う　うん……」

おぎゃっ♥


「お料理……がんばろ ね……♥」
終 オワリ


くり恵から笑顔が消え、
そして戻った理由
終
著者　切傷甲
配信開始　2024年3月
■ブログ
https://ci-en.dlsite.com/creator/4699
■SNS
https://twitter.com/kirikizu1
■ご意見・ご感想など
https://odaibako.net/u/kirikizukoh_post


作 切傷甲
くり恵から笑顔が消え、
そして戻った理由（ワケ）


「ふーっ……」
「ナイスサーブ！このまま勢いで押し切るわよくり恵！」
「キャプテン～！全国大会行こ～ね！」
「うん……！がんばろ！」
「先輩って彼氏居るんですか～？」
「こら！　変な事聞くんじゃないよ！」


「おいコラ!!生意気に俺を見下ろすんじゃねぇ!!」
「うっ！うぐぅっ!!」
「膜ブチ破りたての処女マンコに中出しするぞ!!」
「んぐぅぅぅ～～～っ!!」


「孕め孕め孕めぇっ!!
知らねぇ男の精子で
受精して人生終われ!!」
「むぐぐぐぐぐっ!!」
ドピュッ
ドピュッ
びゅるるるっ!!
学生証
氏名
誕生日
入学日
「くり恵ちゃんねぇ……
クリトリスみてぇな
エロい名前してるじゃねぇか」
「よし 今日からお前は
俺の性奴隷だからな!」
「名前も住所も
全部バレてるんだ
逃げようなんて
思うなよ?」
「あ……
いや……
いやぁ……」
「たすけて……
だれか……」


十年後―
「……」
「!!」
「なつかしいなァ
俺の性奴隷にするって言ったのに
直後に引っ越しやがってよぉ」
「ずっと会いたいと思ってたぜぇ……」
「おい……
お前 くり恵じゃねぇか?」
「やっぱり
そうだ!
くり恵だ!」
「……?」
「ほら お前をレイプした……」
「あの時の男だよ!」
「忘れちまったか?
まぁ仕方がねぇか
俺もだいぶ落ちぶれたからなぁ……」
トスン


「そうそうコレだよコレ！」
「このデッケェパイオツを揉みたくてたまらなかったんだよ！」
「……」
「十年の間に勝手に人妻になりやがって……」
「夫はあの事を知ってんのか？」
もみ
もみ
「！」
「言ってねぇんだろ？」
「言えるワケねぇよなァ処女をこんな奴に捧げたなんて……」
ぷにん
むにゅ
すりすりん!!
「旦那の事を愛してるんだろ？嫌われたくねぇよなァ……？」
「バラされたくなけりゃ判ってるよな……？」
すりすり


「十年経っても相変わらず良い身体してるじゃねぇか」
「ホラ　とっとと尻を突き出しやがれあの日の続きをするんだよ！」
「オイオイお前は背が高いんだから腰を屈めなきゃ入れられねぇだろ」
「チンポ突っ込めるように腰を落とせ！」
「そうそうそうやって穴の位置を合わせるんだよ」
「……」
「あ～……たまんねぇなァ……！ネットリしてて程よくキツくてエロいマンコだぜ！」
ぬぷぷぷぅ
プル
プル
プル
プル♥

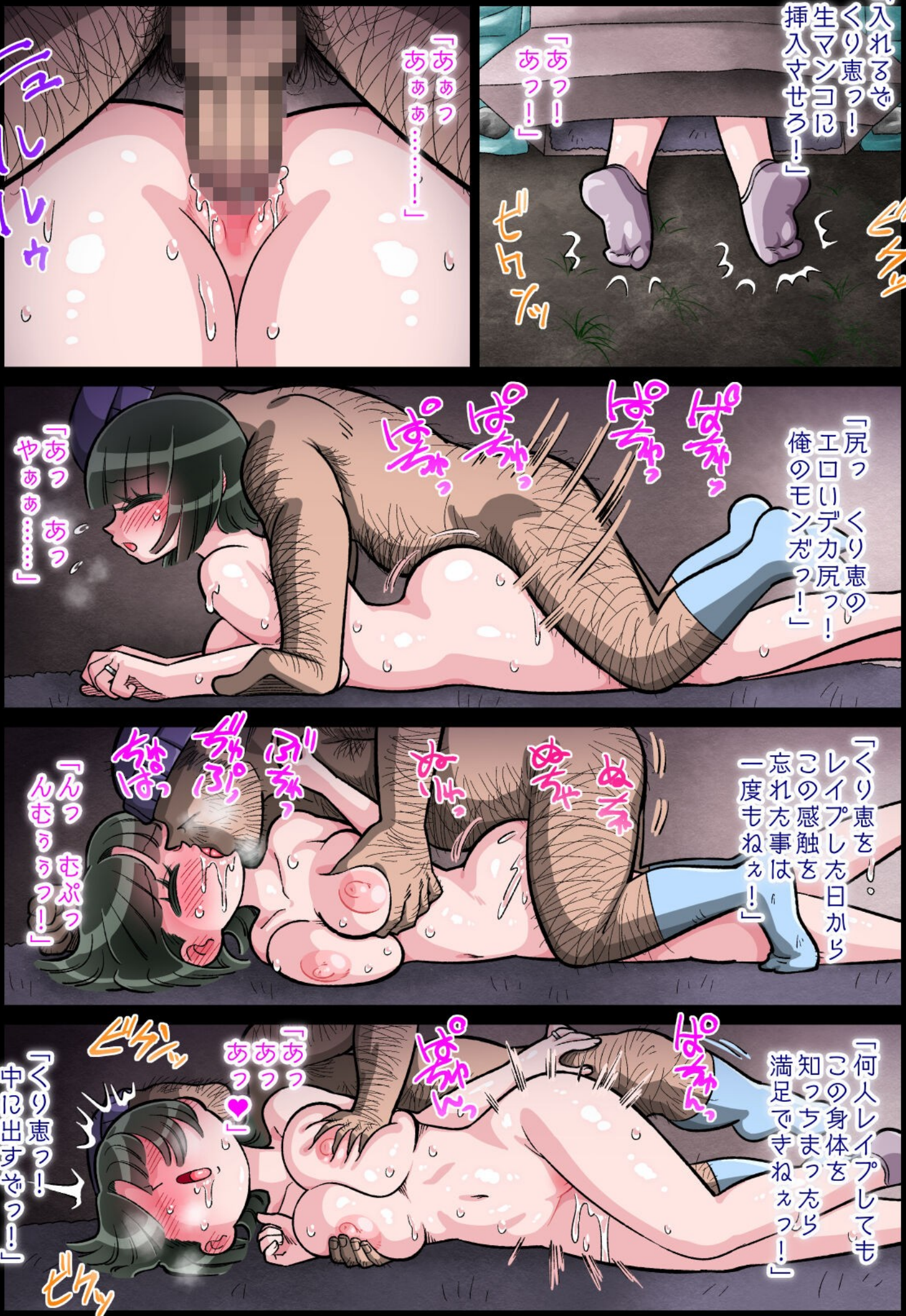

「うっ……うぅ……」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「色んな女をレイプしたがやっぱりくり恵が一番良いぜ！」
「はぁっ……はぁっ……」
プルン
プルン
「人妻にしちゃだいぶキツいがマては旦那のチンポが短小だな？」
にゅぷっ
ぬぷっ
ぬちゃっ
「あっ！いやっ！」
「こんな所まで届いた事ねぇんだろ？マンコの形でバレバレだぜ？」
もみっ
もみっ
にゅぷ
ぬちゃ
「あっ……うっ……」
「毎晩ちゃんと旦那に喜ばせてもらってんのか？」
もみん
「こんな良い身体を持て余してちゃいけねぇなァ」
「や　やめて……」
むぎゅっ
むぎゅっ
「今日から俺がくり恵を女にしてやるぜェ」
「ザーメンを中にぶちまけて子宮を温めてやるからよぉ！」
ぬるっ
ぬっちゃ
にゅぷ


「いやっ……！
いやぁぁ……!!」
「くり恵っ!!
今度こそ逃さねぇ!!
性奴隷になりやがれェ!!」
「あぁぁ……
うぅ　うぅ……」
「うおおっ……
くり恵っ　くり恵ぇっ!!」
プル
プル
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
びくっ
びくっ
びくっ
「昔のレイプも
今日の不貞行為も
バラされたくなけりゃ
……判ってんな？」
「どうだ　再会を祝した
濃厚種付けのお味はよォ」
「は～～っ……
は～～っ……」
「うぅ……
せ　性奴隷に
な　なります……」
ドロ～…
ニュポン


ごめん
今日も帰れない…
料理仕舞っておいて
20:37
りょーかい!
20:45 既読
「はー……」
ビー
チラ
「時間通りだな
来てくれて
うれしいぜ」
「……」
「俺と十年ぶりに
セックスしてから
どうしてた?」
「思い出して
ワレメこすり回して
たんじゃねぇか?」
「今夜は俺の
マイホームで思う存分
楽しませてやるぜ」
「何ぼヤっと立ってんだ
早く素っ裸になるんだよ」
「……」
すりり
「おっ パンティが丸見えに
なった瞬間にエロいニオイ
漂ってきたぜ」
「こりゃマンコも
出来上がってる
やがるな?」


「やっぱりトロトロになってやがったなァ」
ぴちゃ
ぬぢゃ
ちゃぴ
ちゃぴ
「うっ あっ あぅっ……」
「ビッショリ濡れたエロマンコがチンポからザーメン搾り取る動きしてるぜぇ！」
「おらっ 潮吹け！敏感マンコ痙攣させながらエロ汁吹き出せ！」
「い いやっ…… やだっ やっ……」
びくんっ
「あぁぁっ！だ だめっ だめぇっ！」
「へへ 勃起が止まらねぇよ 今度は俺が楽しませてもらう番だな……？」
「はぁ はぁ はぁ……」
イヤァアア!!
しゃぁあ〜

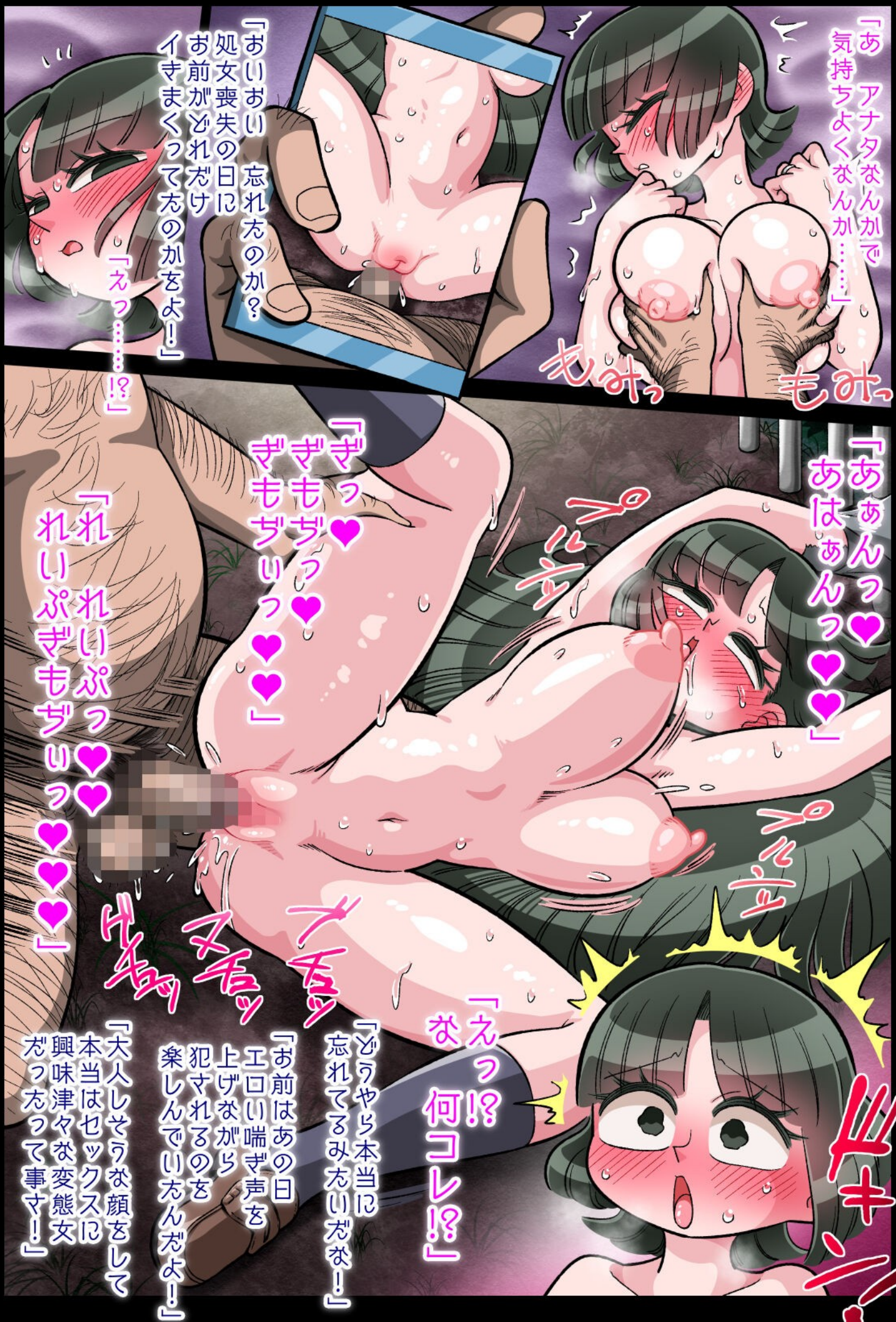

「とっとと中に入りやがれ！案外気に入るかもしれねぇだろ？」
「うぅ……」
「ちょっと小せえからくり恵だと足がはみ出るかもしれねぇけど……まぁ気にすんな！」
「うっ……！くっ臭い……！」
「くり恵ちゃぁ～ん！俺の愛の巣へようこそぉ！」
「やっやだっ……！狭いい……！」
モゾ モゾ
「んうぅっ……！んぷっ うぅっ！」
ブチュッ
ヂュルッ
ブチュッ
「くり恵っ！くり恵ぇっ！お前は俺の女だっ！一生俺の物なんだよっ！」
めりっ
にゅるっ
「あぅっはぅぅ……！」


「入れるぞ くり恵っ！ 生マンコに 挿入ヤせろ！」
「あっ！ あっ！」
ビクッ
ビクンッ
「あぁっ あぁぁ……！」
ニュルルゥ
「尻っ くり恵の エロいデカ尻っ！ 俺のモンだっ！」
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
「あっ あっ やぁぁ……」
「くり恵を！ レイプした日から この感触を 忘れた事は 一度もねぇ！」
ぬちゃ
ぬちゃ
ぷりっ
ぷりっ
「んっ むぷっ んむぅぅっ！」
「何人レイプしても この身体を 知っちまったら 満足できねぇっ！」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「あっ あっ あっ♥」
ビクンッ
「くり恵っ！ 中に出すぞっ！」
ビクッ


「俺に犯されながらイキやがれっ!!」
「あぁっ♥あぁぁあっ♥♥」
ズンズンズン
「あっ……♥あぁっ……♥」
ブルッ
ビュー
ビュッビュッ
どくん!!
「イったな？俺とのセックスでくり恵はイったんだ」
「はぁっ はぁっ 違う……違うの……」
「違うだァ!? 認めるまで今夜は家に帰すねぇからな!!」
「いやっ! やめてっ!」
「やだっ! やだぁ……!! いやぁ……!!」
「フーッ フーッ くり恵ぇ……」
メロン♪
「あんっ♥あんっ……♥」


「へぇ ここがくり恵と旦那さんの寝室ねぇ……」
「綺麗な部屋でうらやましいぜ」
「……」
「ワリいな 押しかけちまってでも勃起が収まらなくて我慢が出来なくてよォ」
「お お願い…… 家には来ないで…… 主人に知られたら……」
「あなたと会ってる所を誰かに見られたらこ 困るの……」
「なら旦那が帰って来る前に早く済ませちまおうぜ」
「うぅ……」
「あっ…… やっ……」
ふにゅん
もみ
「俺の事を旦那だと思ってあのベッドで楽しんでくれよなァ！」


「うぅっ……くぅぅ……」
「どうだ くり恵！俺のチンポでほじくられて気持ち良いだろ？」
「はぁっ……はぁっ……」
「旦那の粗末な物じゃ届かない所までグイグイ突っ込まれて感じてるんだろ？」
「かな 感じてなんか無い……」
「嘘つけ こんなにギュウギュウに締め付けてるのにか？」


「あ アナタなんかで気持ちよくなんか……」
もみっ
もみっ
「おいおい 忘れたのか？処女喪失の日にお前がどれだけイきまくってたのかをよ！」
「えっ……!?」
「あぁんっ♥あはぁんっ♥♥」
「ぎっ♥ぎもぢっ♥ぎもぢいっ♥♥」
「れ れいぷっ♥♥れいぷぎもぢいっ♥♥♥」
プルン
プルン
ナデッ
スチッ
サスッ
「えっ!? 何コレ!?」
「どうやら本当に忘れてるみたいだな！」
「お前はあの日エロい喘ぎ声を上げながら犯されるのを楽しんでいたんだよ！」
「大人しそうな顔をして本当はセックスに興味津々な変態女だったって事さ！」
ドキン！


ビュルルルッ！
「犯してっ♥♥犯してぇぇっ♥♥♥♥」
「中に出してっ♥♥私を汚してぇっ♥♥♥」
「あぁ…私……そうだ……あの時……私はレイプで喜んで……」
「思い出したか？レイプをおねだりする女なんて初めてだったぜ」
ぶりっ
ぶりっ
「もっと……♥もっと犯してください……♥」
「セックス……♥私セックス大好きな変態なんです♥」
ガク
ガク
「おっ……♥おぉっ♥んおぉおっ♥♥」
ゾクゾクゾクゾク


「マぁ 喜ばせてやるぜぇ……！」
「あ……♥ あぁ……♥」
「女に産まれた事を心の底から喜ばせてやるよ!!」
「あぁんっ♥♥いやぁんっ♥♥」
「だめっ♥♥だめぇっ♥♥ぎもぢいいっ♥♥♥」
ぱちゅんっ!!
ぱちゅんっ!!
「せ せっくしゅっ♥ せっくしゅぅぅっ♥♥ せっくしゅし たいいいっ♥♥」
「可哀想になぁ！ こんなにセックスが大好きなのに旦那に相手にしてもらえなくて！」
ぱんっ ぱんっ ぱんっ
「んふーーっ♥♥ んふーーっ♥♥ きしゅっ♥ きしゅぅぅっ♥♥」
「くり恵の口の中っ舐め回してやるからな！」
じゅるっ ぶちゅるっ


「もう自分を騙す必要なんてねぇからな！」
「セックス好きとして産まれた事は何も悪い事じゃねぇんだからよ!!」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「ぎもちっ♥ぎもちっ♥ちんぽっ♥ちんぽこっ♥」
ぷるんっ！
ぷるんっ！
「ちんぽこっ♥きんたまっ♥おとこっ♥すきっ♥」
「は　恥ずかしく無いっ？　せ　セックス好きなのっ　悪いことじゃ　無いっ!?」
たぷっ
たぷっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「悪い事なんかねぇんだよ!!気持ちよくなりてぇんだろ!?」
「な　なりたいっ♥気持ちよくっ♥なりたいっ♥」
にちゃ
ぴちゃ
ぬちゃ
どちゃ


どぱっ どぱっ
どぱぁぁ！
「いやらしいくり恵のコトっ♥♥♥」
プルルッ♥
ぴゅるるる
「いっぱい気持ちよくしてぇぇぇっ♥♥♥」
びゅっ
びゅっ！
びゅっ！！


「ふーっ♥ ふーっ♥ ちゅぱっ♥ ちゅぱっ♥」
ちゅぱっ
ちゅろっ
ぐちゅる
「ちんぽっ♥ ちんぽぉっ♥」
「ちんぽぉぉっ♥♥ おいしいよぉぉっ♥♥」
どろぉ
「どうだったくり恵 もう俺とのセックスが嫌だなんて思わないよな？」
「セックス……♥ セックス好きぃ……♥」
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
「可愛いくり恵の為に これからもたくさんセックスしてやるからな？」
「嬉しい……♥ 嬉しいよぉ……♥」
「そうだ 昔のくり恵みたいに 髪を伸ばせよ その方が可愛いぜ」
「はい……♥ 伸ばします……♥ アナタ好みの女に……なります……♥♥」
ゴポッ

「よぉ　くり恵
今日も色っぽいなァ」

「……」

「これ……
今月の
お金……」

「おう　悪ぃな
いつも助かってるぜ」

「お礼に今日の
ラブホ代は
俺が出してやるよ」

「お金……
ギャンブルにばっか
使わないで……」

スリ
スリ

「わかってるって！
ちゃんと半分は
貯金してるからよォ」

「ちゃんと栄養ある物
食べて……」

くしゃ

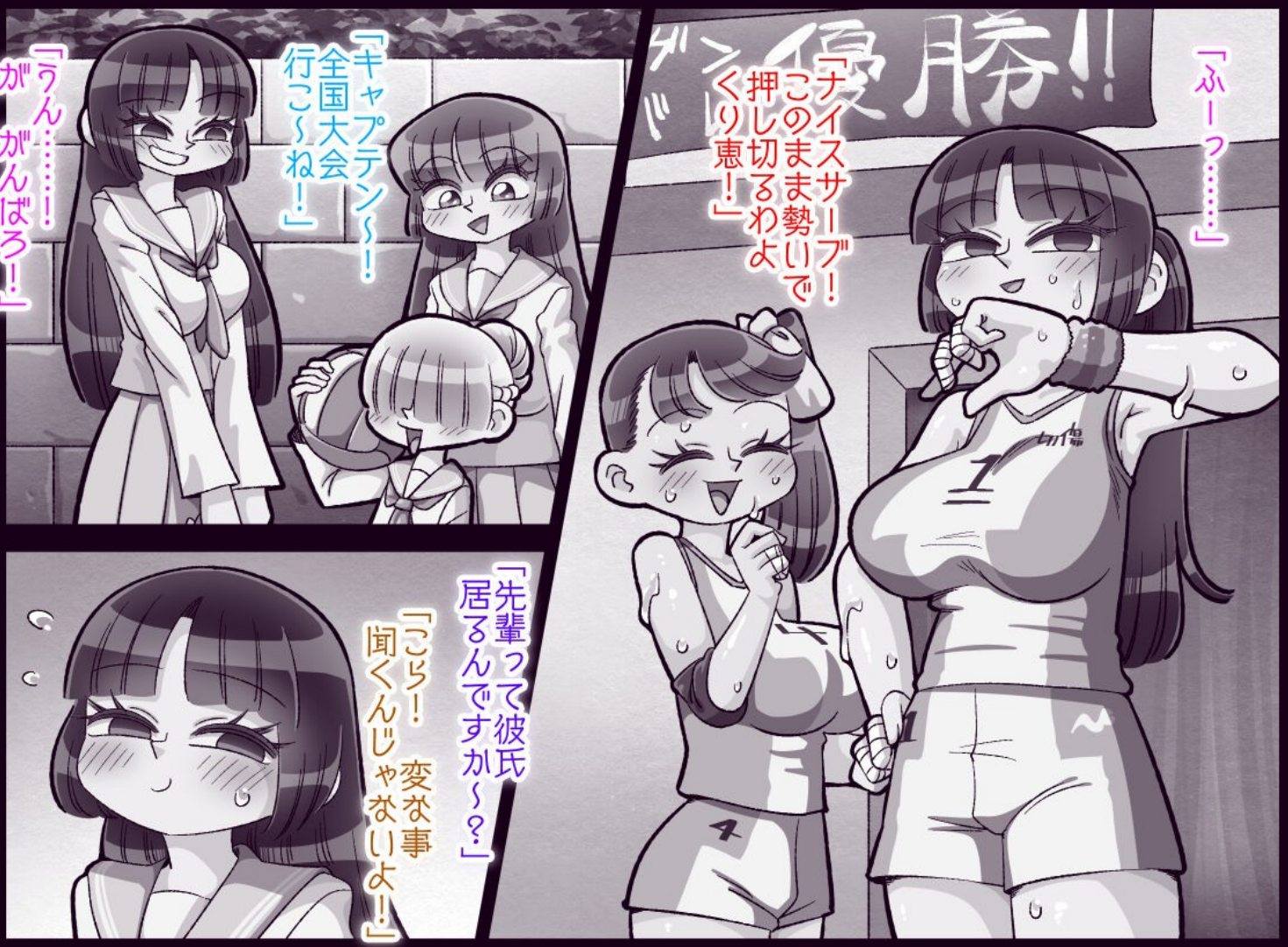
「心配してくれんのか？
嬉しいねぇ……！
じゃあ今度　くり恵の
手料理を食べさせてくれよ！」

「……
う　うん……」

おぎゃっ♥

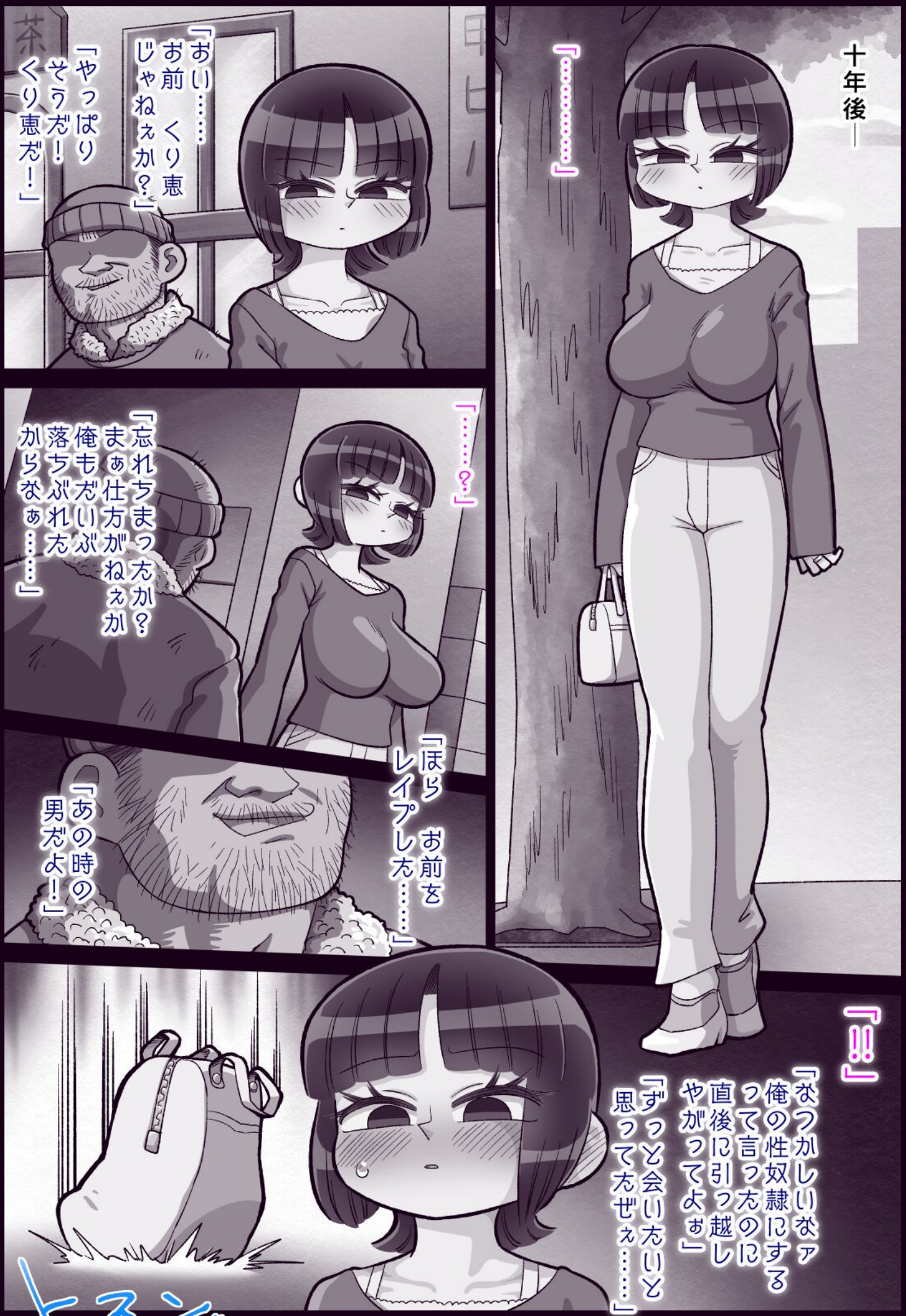

「お料理……がんばろ ね……♥」
終 オワリ

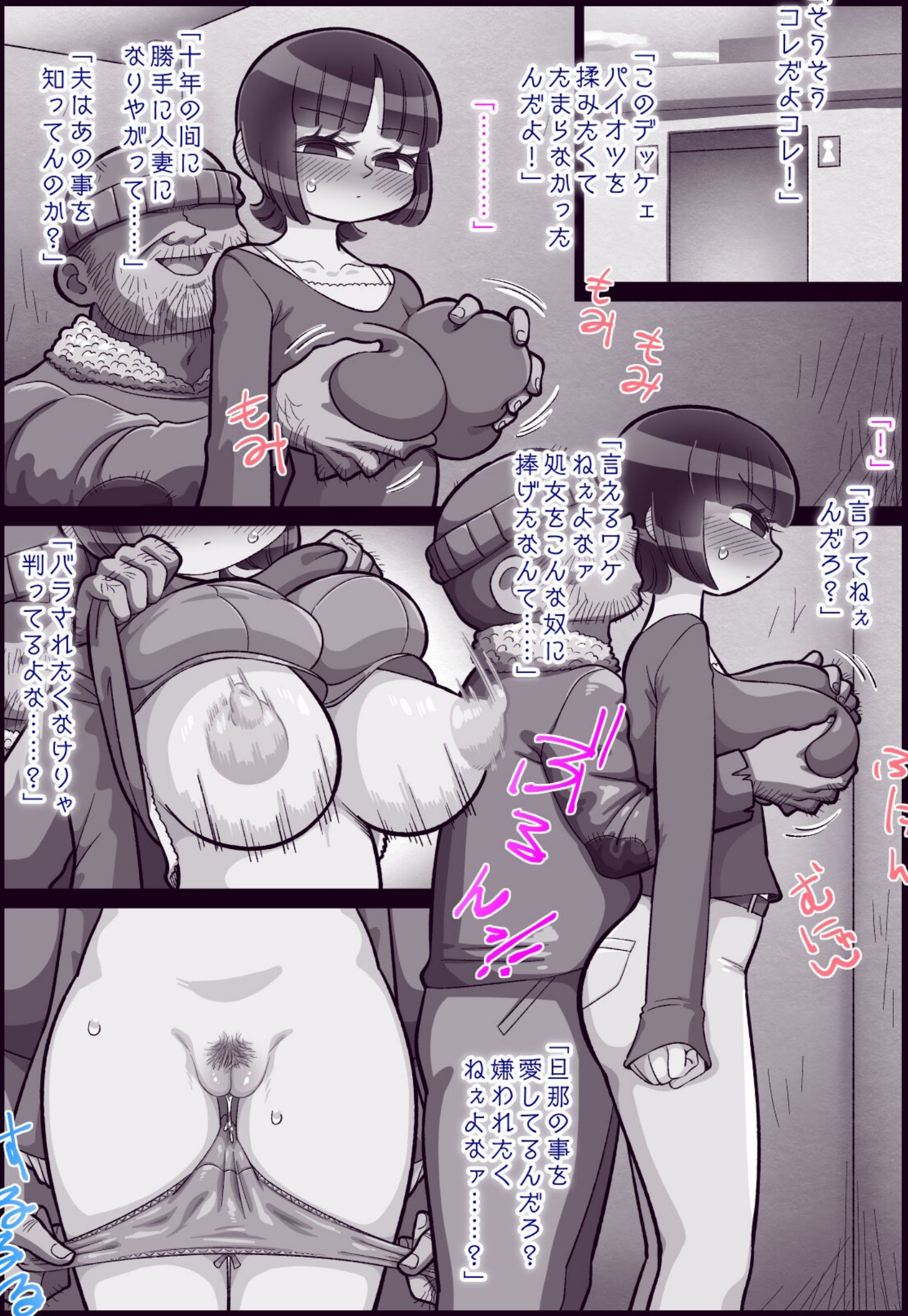

作 切傷甲
くり恵から笑顔が消え、
そして戻った理由（ワケ）

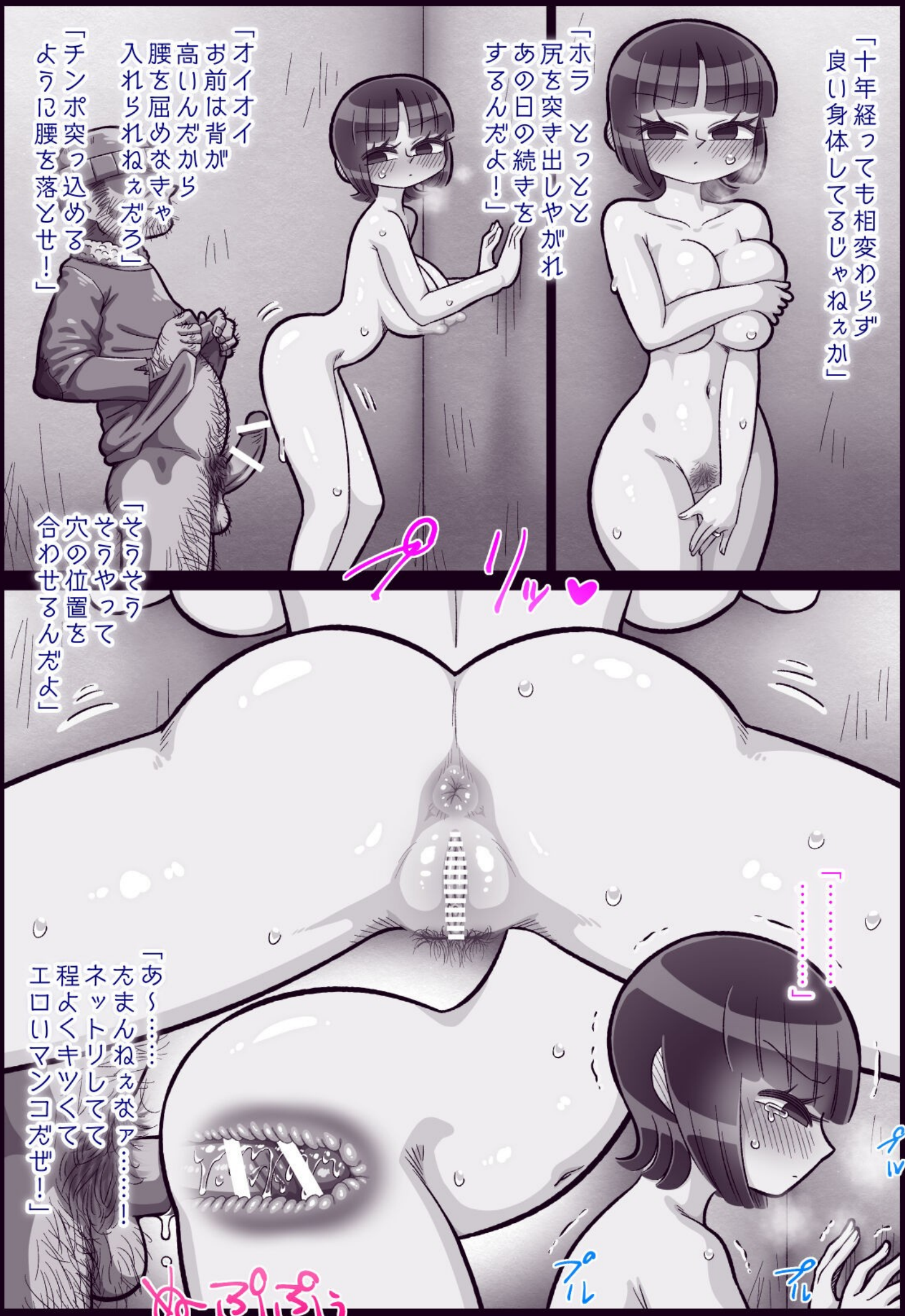

「ふーっ……」
「ナイスサーブ！このまま勢いで押し切るわよくり恵！」
「キャプテン～！全国大会行こ～ね！」
「うん……！がんばろー！」
「先輩って彼氏居るんですか～？」
「こら！　変な事聞くんじゃないよ！」

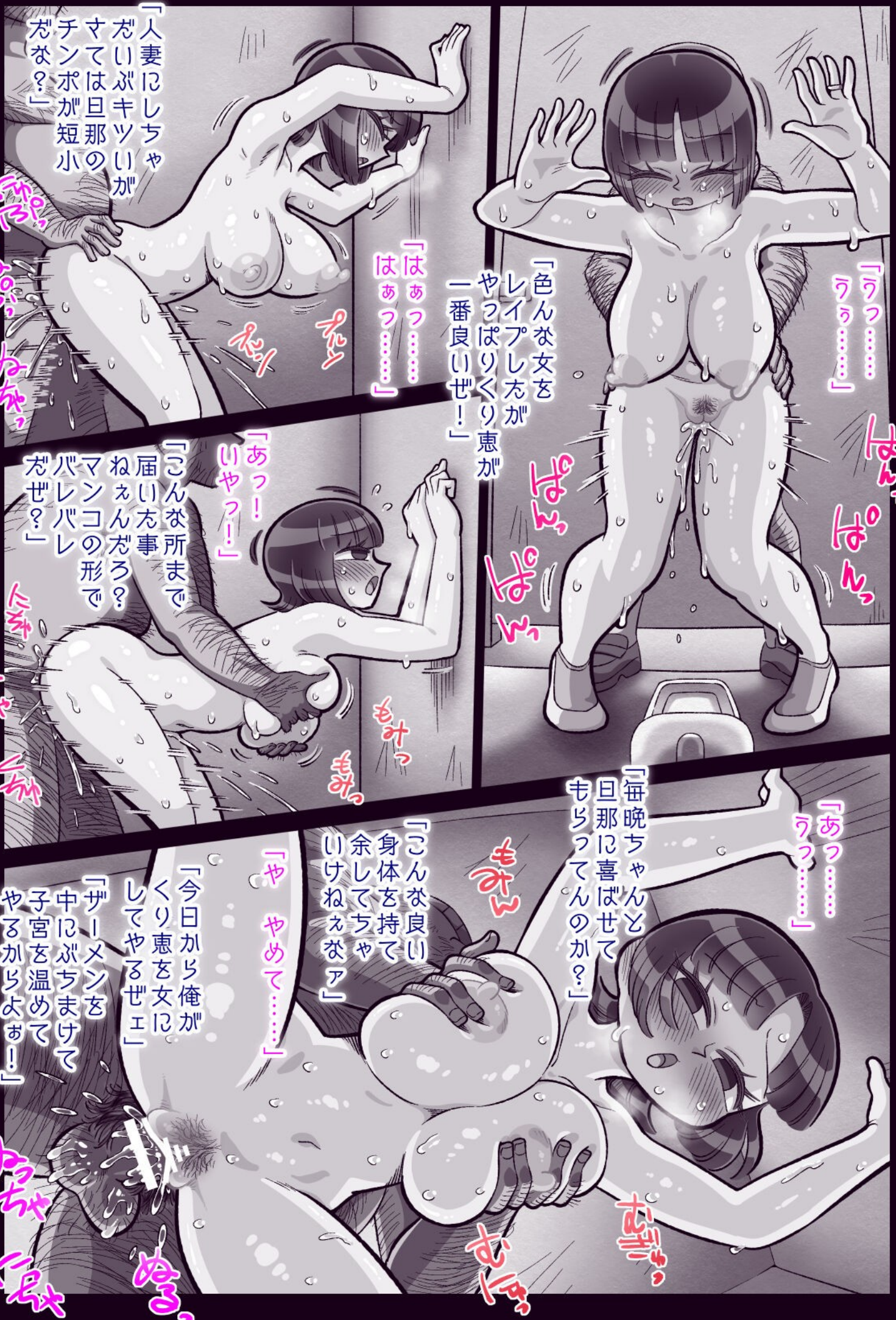

「おいコラ!!生意気に俺を見下ろすんじゃねぇ!!」
「うっ！うぐぅっ!!」
「膜ブチ破りたての処女マンコに中出しするぞ!!」
「んぐうぅぅ～～～っ!!」
ぐちゅん
ぐちゅっ
ぬぷっ
ぷるん
ぷるっ
ぷるん

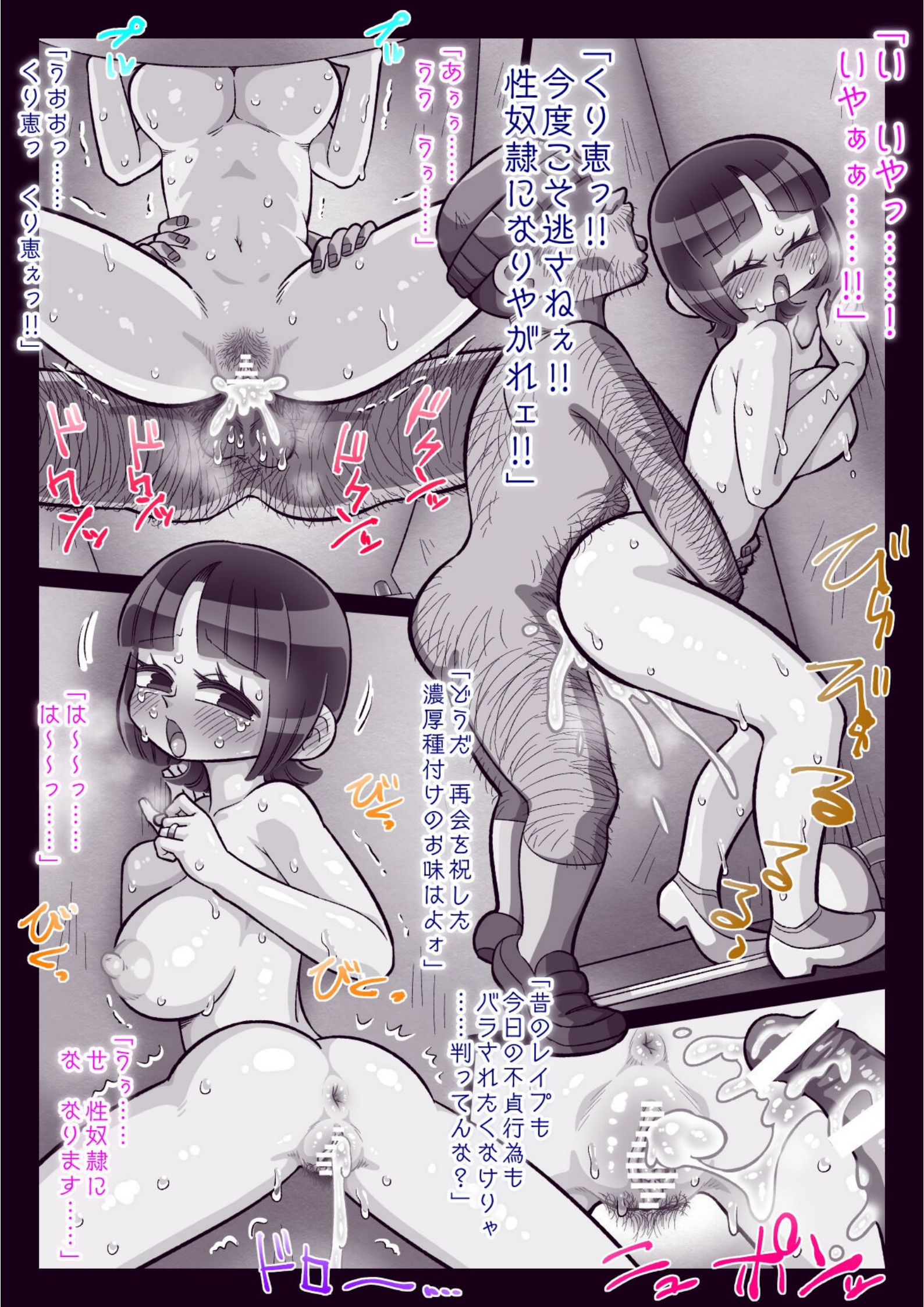

「孕め孕め孕めぇっ!!
知らねぇ男の精子で
受精して人生終われ!!」
「むぐぐぐぐぐっ!!」
ドピュッ
ドビュッ
びゅるるるっ!!
学生証
氏名
誕生日
入学日
「くり恵ちゃんねぇ……
クリトリスみてぇな
エロい名前してるじゃねぇか」
「よし 今日からお前は
俺の性奴隷だからな!」
「名前も住所も
全部バレてるんだ
逃げようなんて
思うなよ?」
「あ……
いや……
いやぁ……」
「たすけて……
だれか……」


十年後―
「……」
「!!」
「なつかしいなァ
俺の性奴隷にする
って言ったのに
直後に引っ越し
やがってよぉ」
「ずっと会いたいと
思ってたぜぇ……」
「おい……
お前 くり恵
じゃねぇか?」
「やっぱり
そうだ!
くり恵だ!」
「……?」
「忘れちまったか?
まぁ仕方がねぇか
俺もだいぶ
落ちぶれた
からなぁ……」
「ほら お前を
レイプした……」
「あの時の
男だよ!」
トスンッ


「そうそうコレだよコレ！」
「このデッケェパイオツを揉みたくてたまらなかったんだよ！」
「……」
「十年の間に勝手に人妻になりやがって……」
「夫はあの事を知ってんのか？」
もみ
もみ
もみ
「！」
「言ってねぇんだろ？」
「言えるワケねぇよなァ処女をこんな奴に捧げたなんて……」
ぶにゅん
むにゅ
ずるんっ!!
「バラされたくなけりゃ判ってるよな……？」
「旦那の事を愛してるんだろ？嫌われたくねぇよなァ……？」
すりすり


「十年経っても相変わらず良い身体してるじゃねぇか」
「ホラ　とっとと尻を突き出しやがれあの日の続きをするんだよ！」
「オイオイお前は背が高いんだから腰を屈めなきゃ入れられねぇだろ」
「チンポ突っ込めるように腰を落とせ！」
「そうそうそうやって穴の位置を合わせるんだよ」
「……」
「あ～……たまんねぇなァ……！ネットリしてて程よくキツくてエロいマンコだぜ！」
ぬぷぷぷぅ
プル
プル
プル

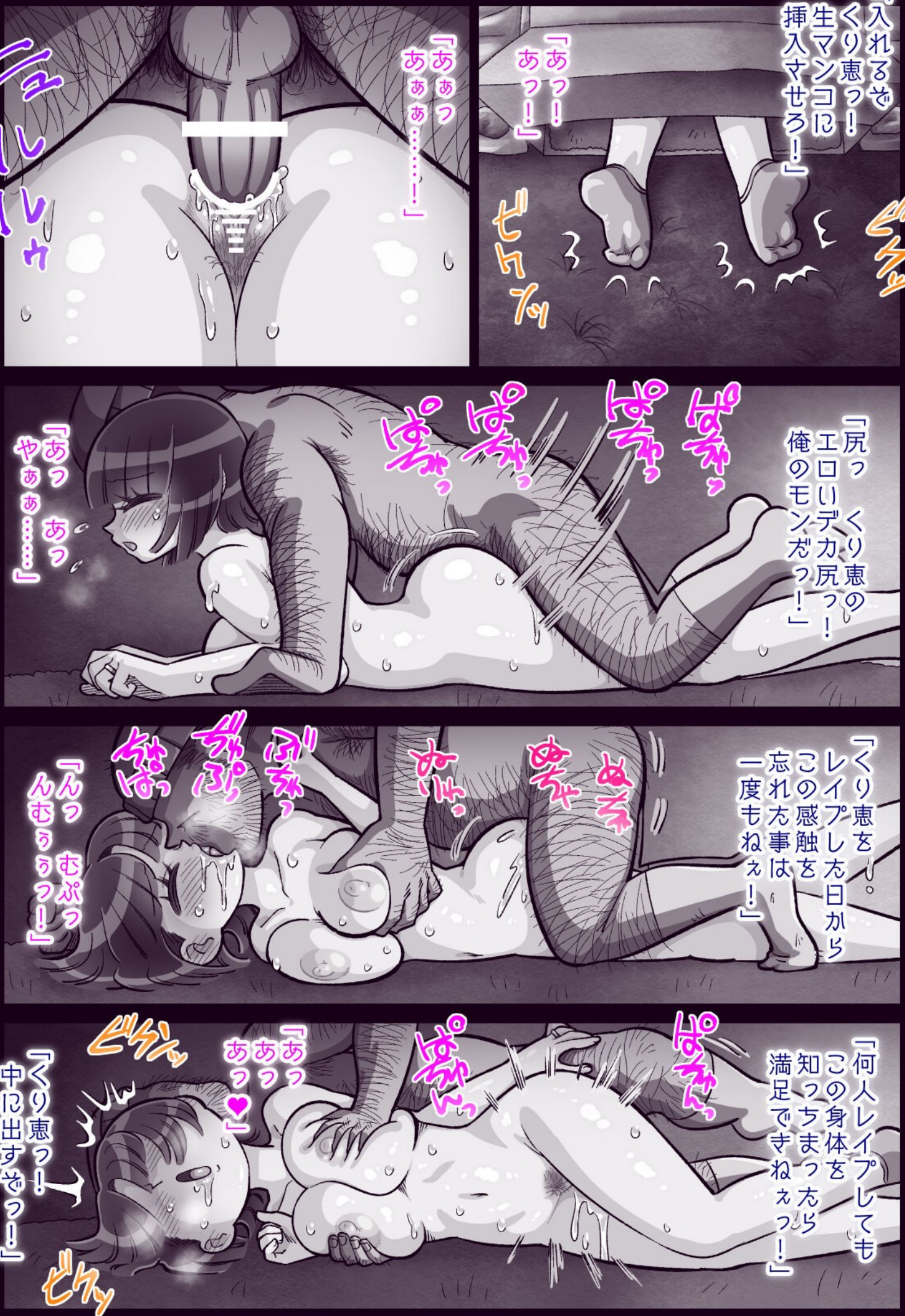

「うっ……うぅ……」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「色んな女をレイプしたがやっぱりくり恵が一番良いぜ！」
「はぁっ……はぁっ……」
プルン
ぬぷっ
ぬちゃっ
「人妻にしちゃだいぶキツいがマてはは旦那のチンポが短小だな？」
「あっ……うっ……」
「昼晩ちゃんと旦那に喜ばせてもらってんのか？」
むぎゅっ
むぱっ
もみっ
「こんな良い身体を持て余してちゃいけねぇなァ」
「や　やめて……」
「今日から俺がくり恵を女にしてやるぜェ」
「ザーメンを中にぶちまけて子宮を温めてやるからよぉ！」
ぬるっ
にゅぷ
ぬちゃ
「あっ！いやっ！」
「こんな所まで届いた事ねぇんだろ？マンコの形でバレバレだぜ？」
もみっ
もみっ
にゅぷ
ぬちゃ
にゅぷ


「いやっ……！
いやぁぁ……!!」
「くり恵っ!!
今度こそ逃さねぇ!!
性奴隷になりやがれェ!!」
「あぁぁ……
うぅ　うぅ……」
プル
「うおおっ……
くり恵っ　くり恵ぇっ!!」
ドクッ
ドクッ
ドクッ
びくっ
びくっ
「昔のレイプも
今日の不貞行為も
バラされたくなけりゃ
……判ってんな？」
「どうだ　再会を祝した
濃厚種付けのお味はよォ」
「は～～っ……
は～～っ……」
「うぅ……
せ　性奴隷に
な　なります……」
ドロ～…
ニュポン


ごめん
今日も帰れない…
料理仕舞っておいて
20:37
リョーカイ！
20:45 既読
「はー……」
ビー
チラ
「時間通りだな
来てくれて
うれしいぜ」
「……」
「俺と十年ぶりに
セックスしてから
どうしてた？」
「思い出して
ワレメこすり回して
たんじゃねぇか？」
「何ぼヤっと立ってんだ
早く素っ裸になるんだよ」
「……」
「今夜は俺の
マイホームで思う存分
楽しませてやるぜ」
「おっ　パンティが丸見えに
なった瞬間にエロいニオイ
漂ってきたぜ」
すりすり
「こりゃマンコも
出来上がってる
やがるな？」

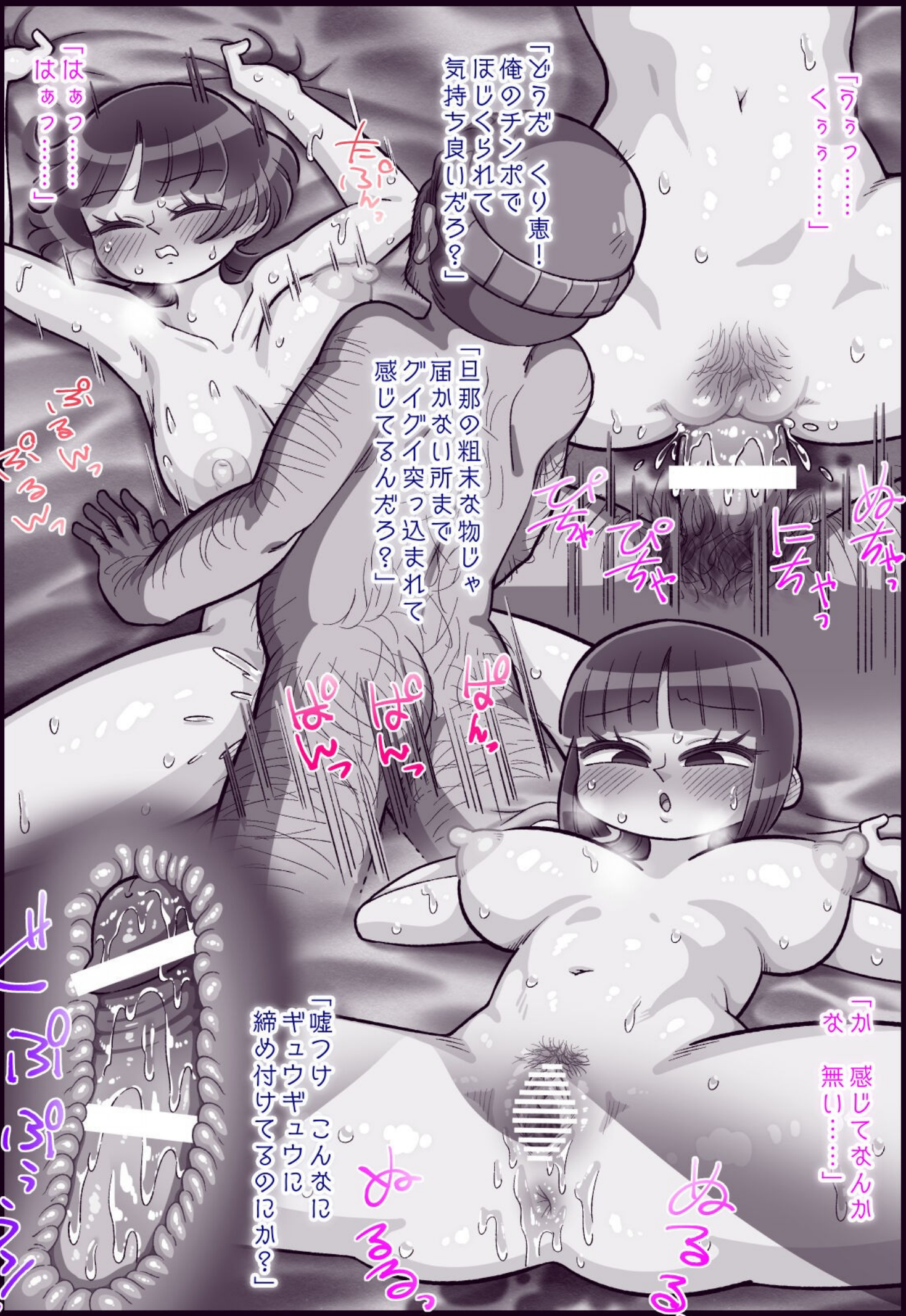

「やっぱりトロトロになってやがったなァ」
ぴゃ
にちゃ
ぬぢゃ
ちゃぴ
ちゃぴ
ちゃぴ
「うっ あっ あぅっ……」
「ビッショリ濡れたエロマンコがチンポからザーメン搾り取る動きしてるぜぇ！」
「おらっ 潮吹け！敏感マンコ痙攣させながらエロ汁吹き出せ！」
「い いやっ…… やだっ やっ……」
びくんっ
「あぁぁっ！だ だめっ だめぇっ！」
「へへ 勃起が止まらねぇよ 今度は俺が楽しませてもらう番だな……？」
「はぁ はぁ はぁ……」
イヤァアア!!
しゃおぉ〜

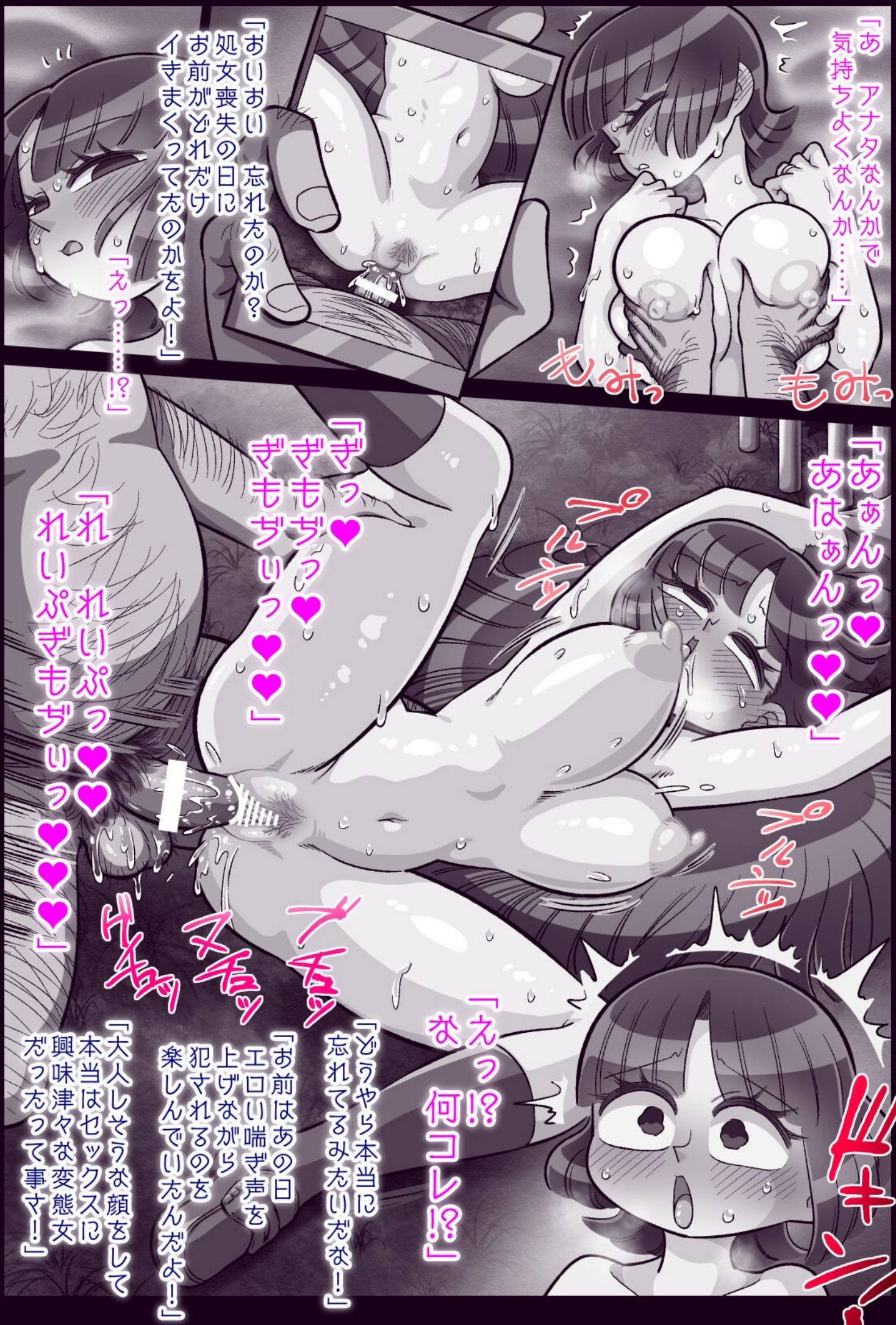

「とっとと中に入りやがれ！案外気に入るかもしれねぇだろ？」
「うぅ……」
「ちょっと小せえからくり恵だと足がはみ出るかもしれねぇけど……まぁ　気にすんな！」
「うっ……！　くっ　臭い……！」
「くり恵ちゃぁ～ん！俺の愛の巣へようこそぉ！」
「や　やだっ……！　狭いい……！」
モゾ　モゾ
「んうぅっ……！　んぷっ　うぅっ！」
ブチュッ
ヂュルッ
ブチュッ
「くり恵っ！　くり恵ぇっ！　お前は俺の女だっ！　一生俺の物なんだよっ！」
めりっ
にゅるっ
「あうっ　はうぅ……！」

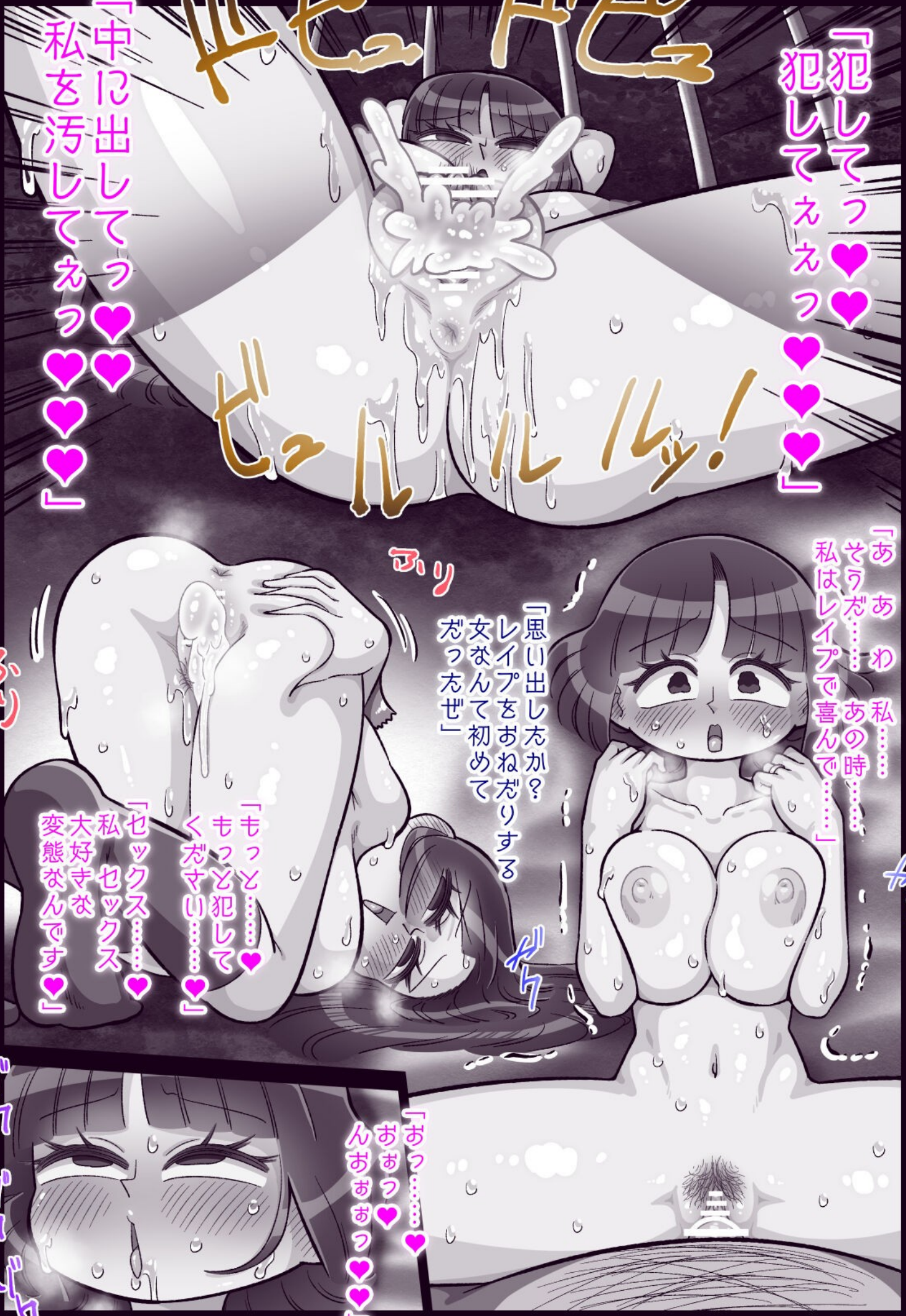

「入れるぞ くり恵っ！ 生マンコに 挿入マせろ！」
「あっ！ あっ！」
ビクッ
ビクンッ
「あぁっ あぁぁ……！」
ニュルルゥ
「尻っ くり恵の エロいデカ尻っ！ 俺のモンだっ！」
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
「あっ あっ やぁぁ……」
「くり恵を レイプした日から この感触を 忘れた事は 一度もねぇ！」
ぬちゃ
ぬちゃ
ぬぷっ
ぷりっ
ぷりっ
ぷりっ
「んっ むぷっ んむぅぅっ！」
「何人レイプしても この身体を 知っちまったら 満足できねぇっ！」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「あっ あっ あっ♥」
ビクンッ
「くり恵っ！ 中に出すぞっ！」
どくっ

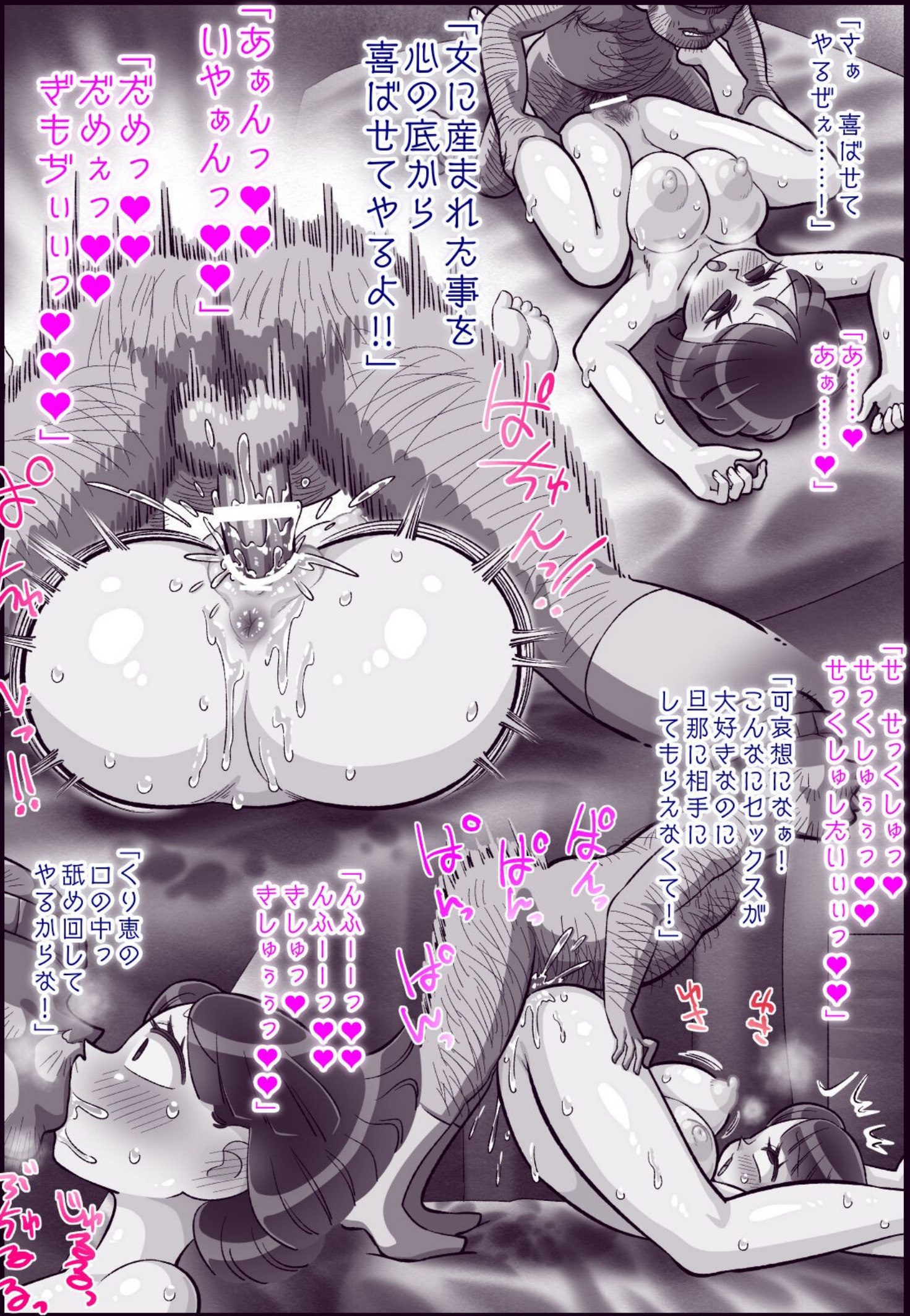

「俺に犯されながらイキやがれっ!!」
「あぁっ♥あぁぁあっ♥♥」
ズン ズン ズン
「あっ……♥あぁっ……♥」
ブルッ
ブルッ
ブルッ
ブルッ
どーん!!
「イったな？俺とのセックスでくり恵はイったんだ」
「はぁっ はぁっ 違う……違うの……」
「違うだァ!? 認めるまで今夜は家に帰すねぇからな!!」
「いやっ！やめてっ！」
「ヤだっ！ヤだぁ……！いやぁ……!!」
「フーッ フーッ くり恵ぇ……」
メロン♥
「あんっ♥あんっ……♥」


「へぇ ここがくり恵と旦那さんの寝室ねぇ……」
「綺麗な部屋でうらやましいぜ」
「……」
「ワリいな 押しかけちまってでも勃起が収まらなくて我慢が出来なくてよォ」
「お お願い…… 家には来ないで…… 主人に知られたら……」
「あなたと会ってる所を誰かに見られたらこ 困るの……」
「なら旦那が帰って来る前に早く済ませちまおうぜ」
「うぅ……」
「あっ…… やっ……」
ふにゅん
もみ…
「俺の事を旦那だと思ってあのベッドで楽しんでくれよなァ！」


「うぅっ……くぅぅ……」
「どうだ くり恵！俺のチンポでほじくられて気持ち良いだろ？」
「はぁっ……はぁっ……」
「旦那の粗末な物じゃ届かない所までグイグイ突っ込まれて感じてるんだろ？」
「かな 感じてなんか無い……」
「嘘つけ こんなにギュウギュウに締め付けてるのにか？」


「あ　アナタなんかで気持ちよくなんか……」
もみっ
もみっ
「おいおい　忘れたのか？処女喪失の日にお前がどれだけイきまくってたのかをよ！」
「えっ……!?」
「あぁんっ❤あはぁんっ❤❤」
プルン
「ぎっ❤ぎもぢっ❤ぎもぢいっ❤❤」
プルン
「れ　れいぷっ❤❤れいぷぎもぢいっ❤❤❤」
ヌチョッ
ヌチョッ
「えっ!?　な　何コレ!?」
「どうやら本当に忘れてるみたいだな！」
「お前はあの日エロい喘ぎ声を上げながら犯されるのを楽しんでいたんだよ！」
「大人しそうな顔をして本当はセックスに興味津々な変態女だったって事さ！」
ドキン！

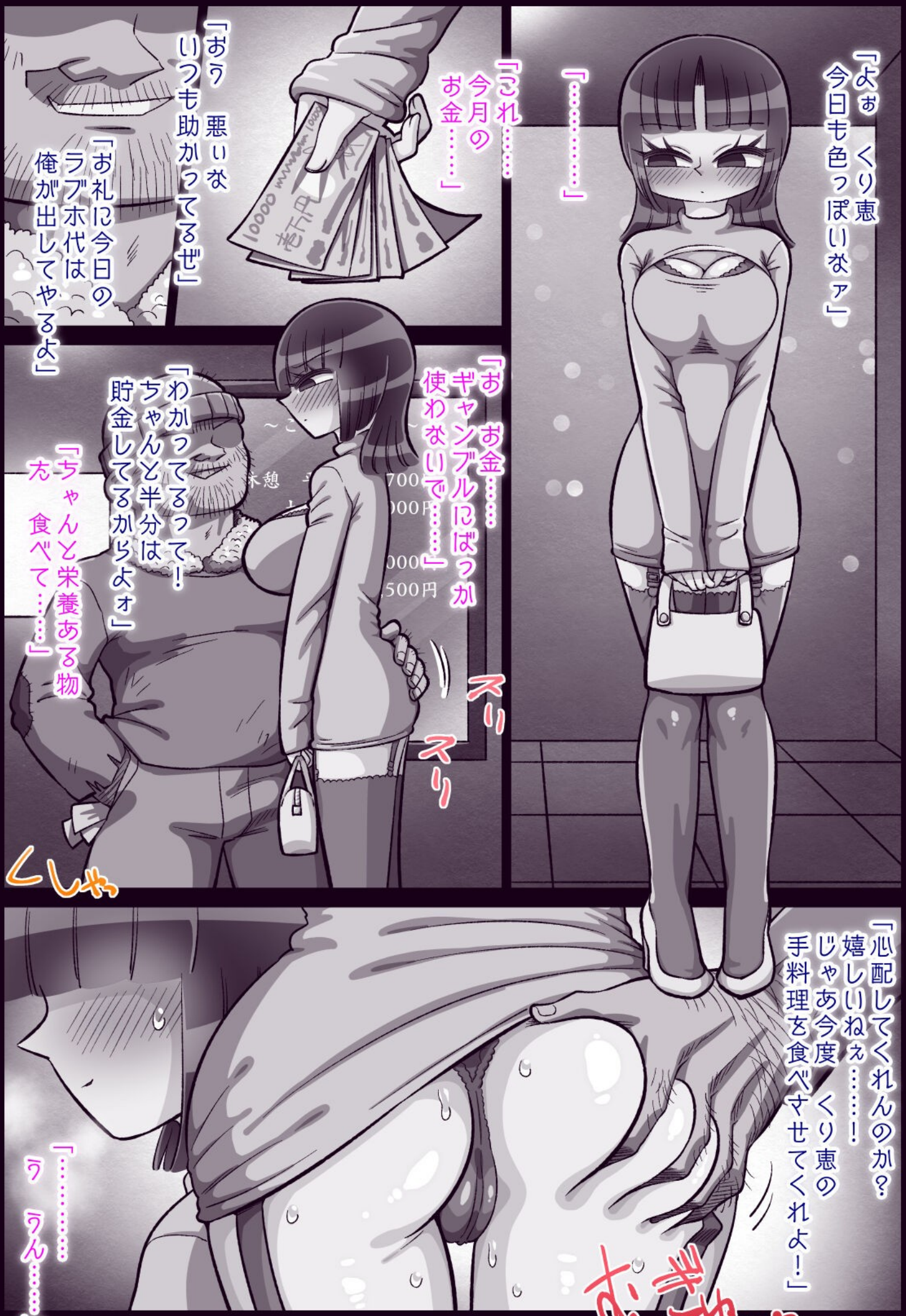

「犯してっ♥♥犯してぇぇっ♥♥♥♥」
「中に出してっ♥♥私を汚してぇっ♥♥♥♥」
ビュルルルッ！
「あ あわ 私……そうだ……あの時……私はレイプで喜んで……」
「思い出したか？レイプをおねだりする女なんて初めてだったぜ」
ぶりっ
ぶりっ
「もっと……♥もっと犯してください……♥」
「セックス……♥私セックス大好きな変態なんです♥」
ガク
ガク
ガク
「おっ……♥おぉっ♥んおぉおっ♥♥」
ゾクゾクゾク


「さぁ 喜ばせてやるぜぇ……！」
「あ……♥ あぁ……♥」
「女に産まれた事を心の底から喜ばせてやるよ!!」
「あぁんっ♥♥いやぁんっ♥♥」
「だめっ♥♥だめぇっ♥♥ぎもぢいいっ♥♥♥」
ぱちゅんっ!!
ぱちゅんっ!!
「せ せっくしゅっ♥ せっくしゅぅぅっ♥♥ せっくしゅし たいいいっ♥♥」
「可哀想になぁ！ こんなにセックスが大好きなのに旦那に相手にしてもらえなくて！」
ぱんっ ぱんっ ぱんっ
「んふーーっ♥♥ んふーーっ♥♥ きしゅっ♥ きしゅぅぅっ♥♥」
「くり恵の口の中っ舐め回してやるからな！」
じゅるっ ぶちゅるるっ


「もう自分を騙す必要なんてねぇからな！」
「セックス好きとして産まれた事は何も悪い事じゃねぇんだからよ!!」
「は 恥ずかしく無いっ？ せ セックス好きなのっ 悪いことじゃ 無いっ!?」
「悪い事なんかねぇんだよ!! 気持ちよくなりてぇんだろ!?」
「なりたいっ♥ 気持ちよくっ♥ なりたいっ♥」
「ぎもちっ♥ ぎもちっ♥ ちんぽっ♥ ちんぽこっ♥」
「ちんぽこっ♥ きんたまっ♥ おとこっ♥ すきっ♥」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
ぷるんっ!
ぷるんっ!
たぷっ
たぷっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
にちゃ
ぴちゃ
ぬちゃ
ぐちゃ

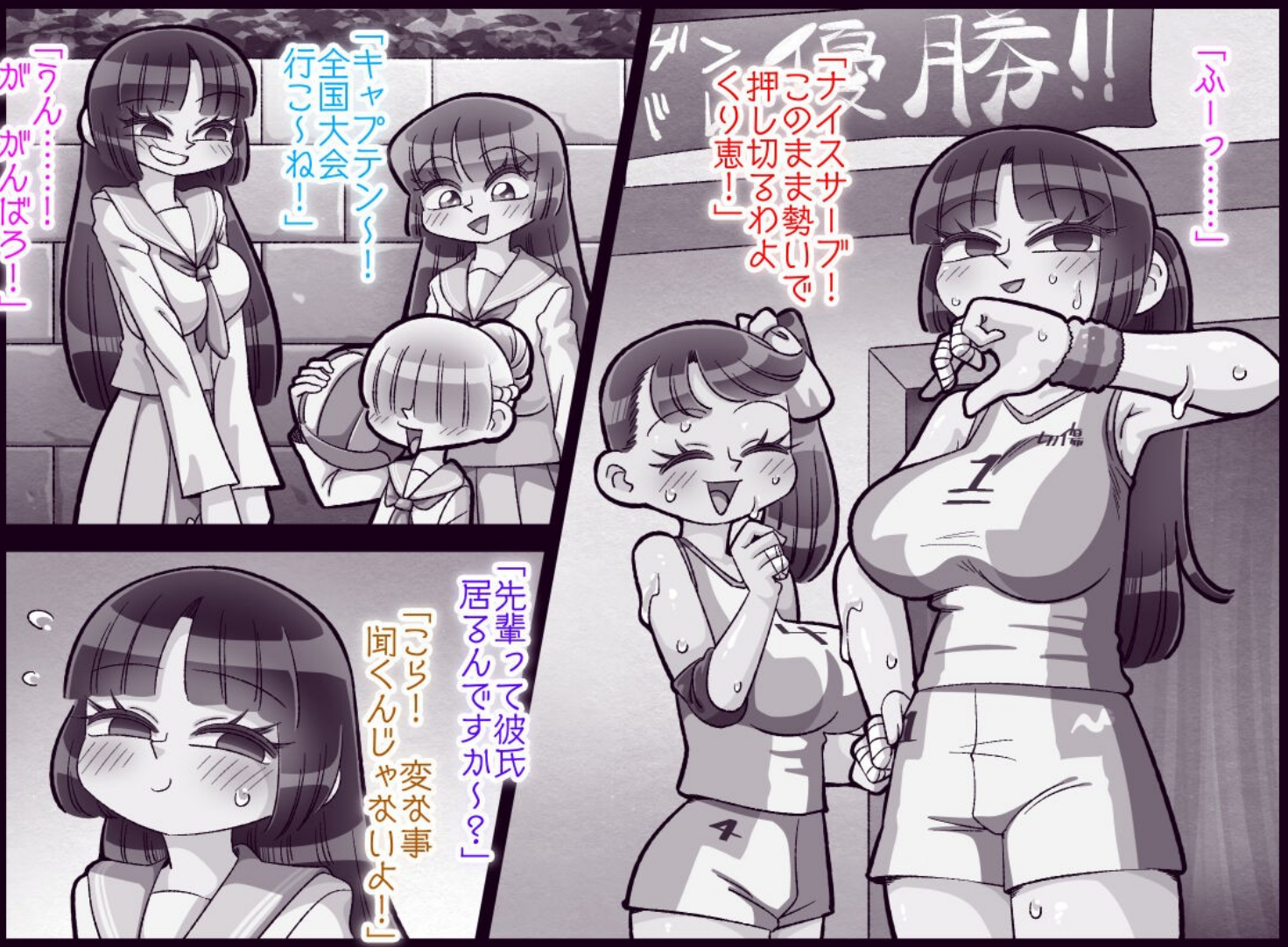

どぱっ どぱっ
どぱぁぁ！
「いやらしいくり恵のコトっ♥♥♥」
ぴゅるるっ
ぴゅるっ♥
びゅるるるっ
「いっぱい気持ちよくしてぇぇぇっ♥♥♥」
ぴゅっ！
びゅっ！
ぴゅるるるっ！


「ふーっ♥ ふーっ♥ ちゅぱっ♥ ちゅぱっ♥」
ちゅぱっ
ちゅろっ
ぐちゅる
「ちんぽっ♥ ちんぽぉっ♥」
どろぉ
「ちんぽぉぉっ♥♥ おいしいよぉぉっ♥♥」
「どうだったくり恵 もう俺とのセックスが嫌だなんて思わないよな？」
「セックス……♥ セックス好きぃ……♥」
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
「可愛いくり恵の為に これからもたくさん セックスしてやるからな？」
「嬉しい……♥ 嬉しいよぉ……♥」
「そうだ 昔のくり恵みたいに 髪を伸ばせよ その方が可愛いぜ」
「はい……♥ 伸ばします……♥ アナタ好みの女に……なります……♥♥」
ゴポッ


「よぉ くり恵 今日も色っぽいなァ」
「……」
「これ……今月のお金……」
「おう 悪いな いつも助かってるぜ」
「お礼に今日のラブホ代は俺が出してやるよ」
「お お金……ギャンブルにばっか使わないで……」
「わかってるって！ ちゃんと半分は貯金してるからよォ」
「ちゃんと栄養ある物 た 食べて……」
スリ
スリ
くしゃ
「心配してくれんのか？ 嬉しいねぇ……！ じゃあ今度 くり恵の手料理を食べさせてくれよ！」
「……う うん……」
おぎゃっ♥

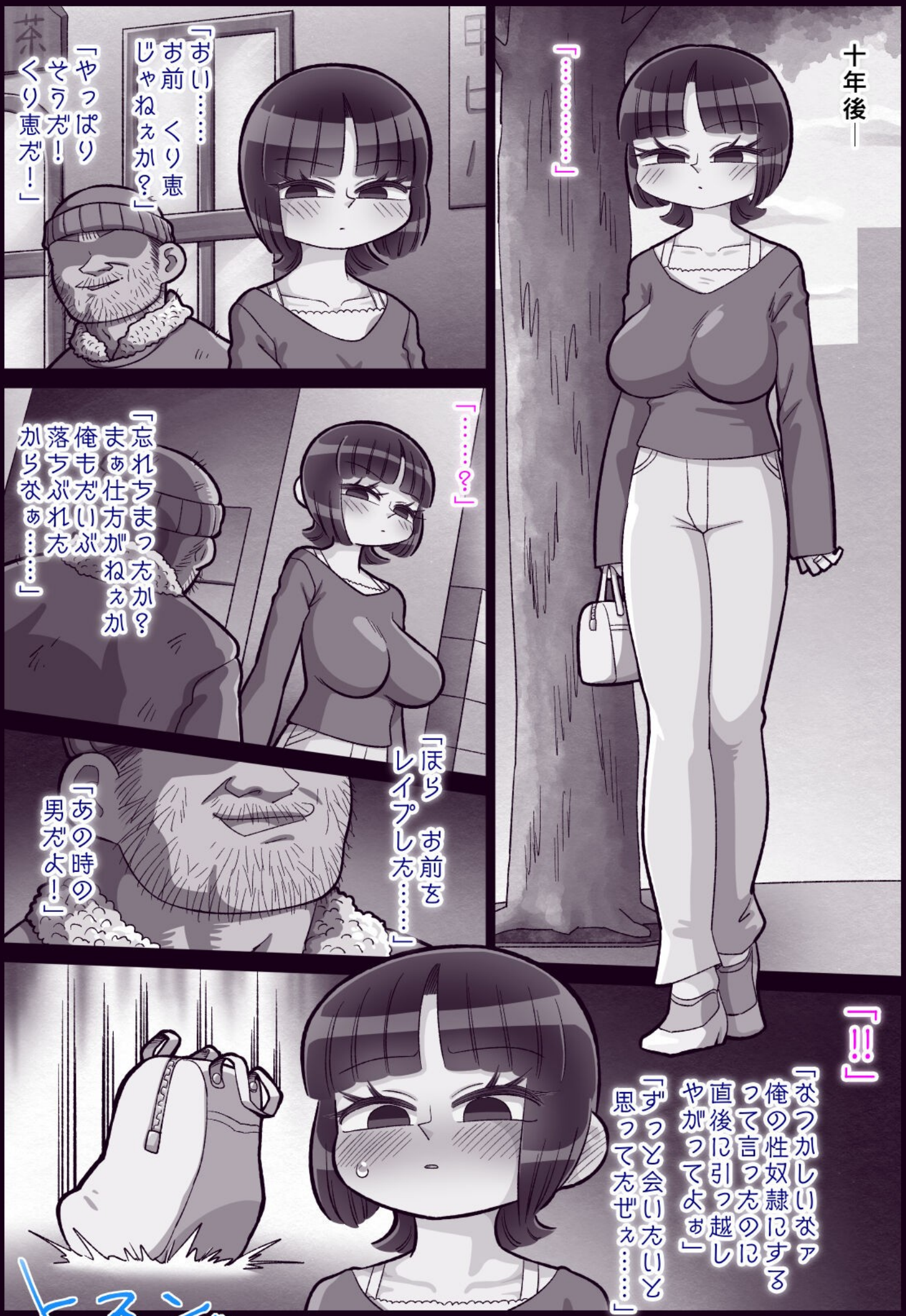

「お料理……がんばろ　ね……♥」
終 オワリ


作 切傷甲
くり恵から笑顔が消え、
そして戻った理由（ワケ）

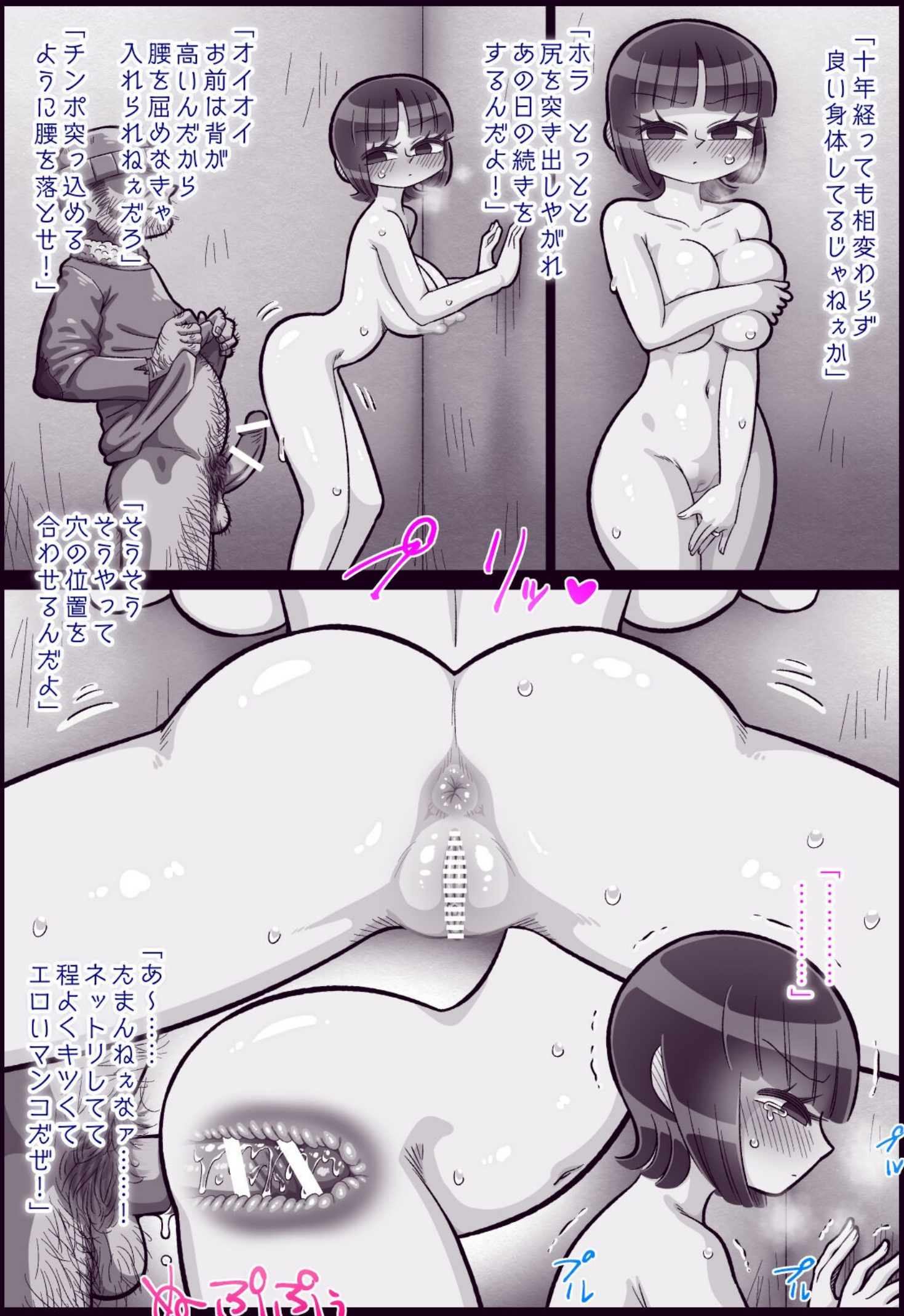

「ふーっ……」
「ナイスサーブ！このまま勢いで押し切るわよくり恵！」
「キャプテン～！全国大会行こ～ね！」
「うん……！がんばろー！」
「先輩って彼氏居るんですか～？」
「こら！　変な事聞くんじゃないよ！」

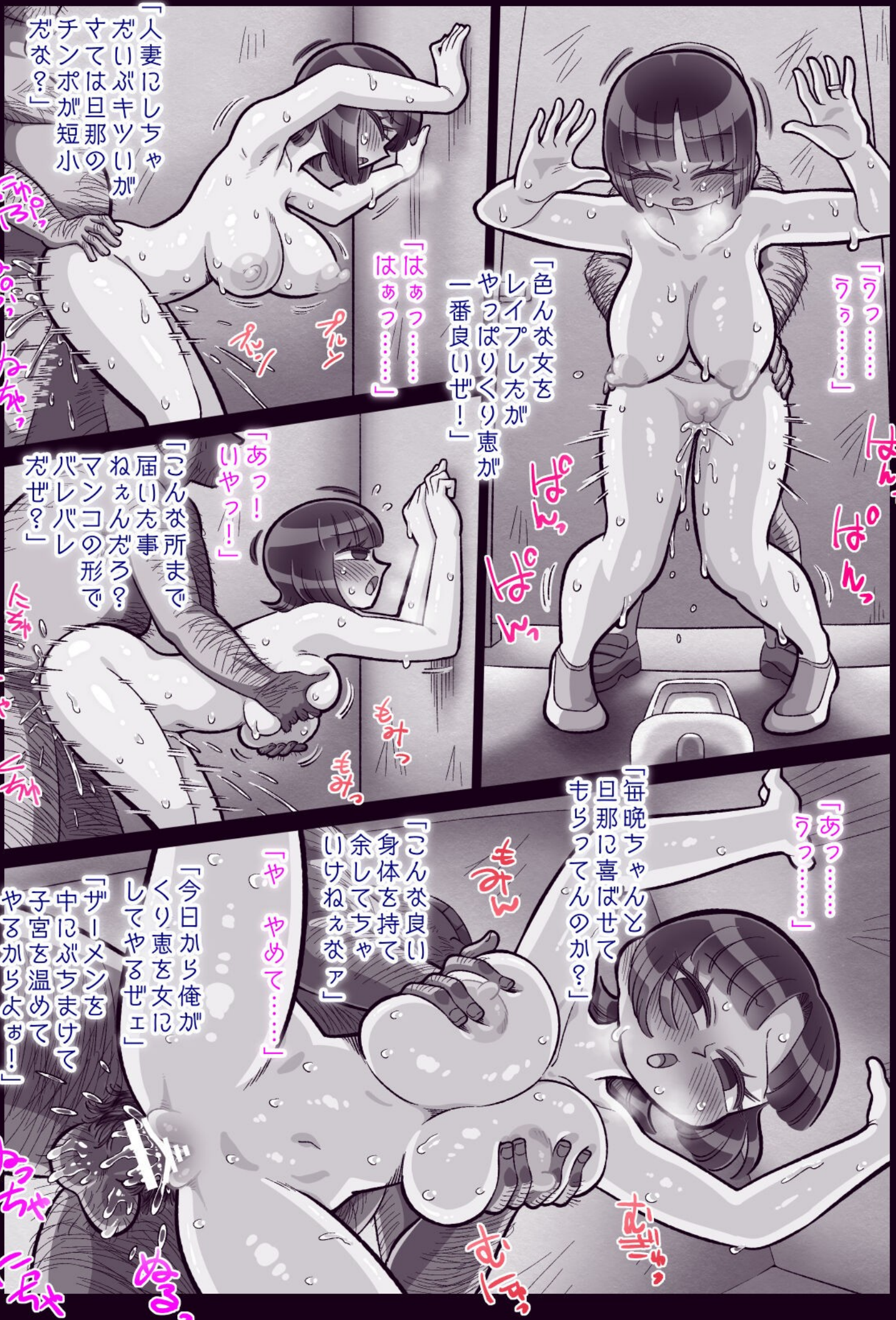

「おいコラ!!生意気に俺を見下ろすんじゃねぇ!!」
「うっ！うぐぅっ!!」
「膜ブチ破りたての処女マンコに中出しするぞ!!」
「んぐぅぅぅ～～～っ!!」
ぐちゅん
ぐちゅっ
ぬるっ
ぴるっ
ぷるっ
ぷるっ

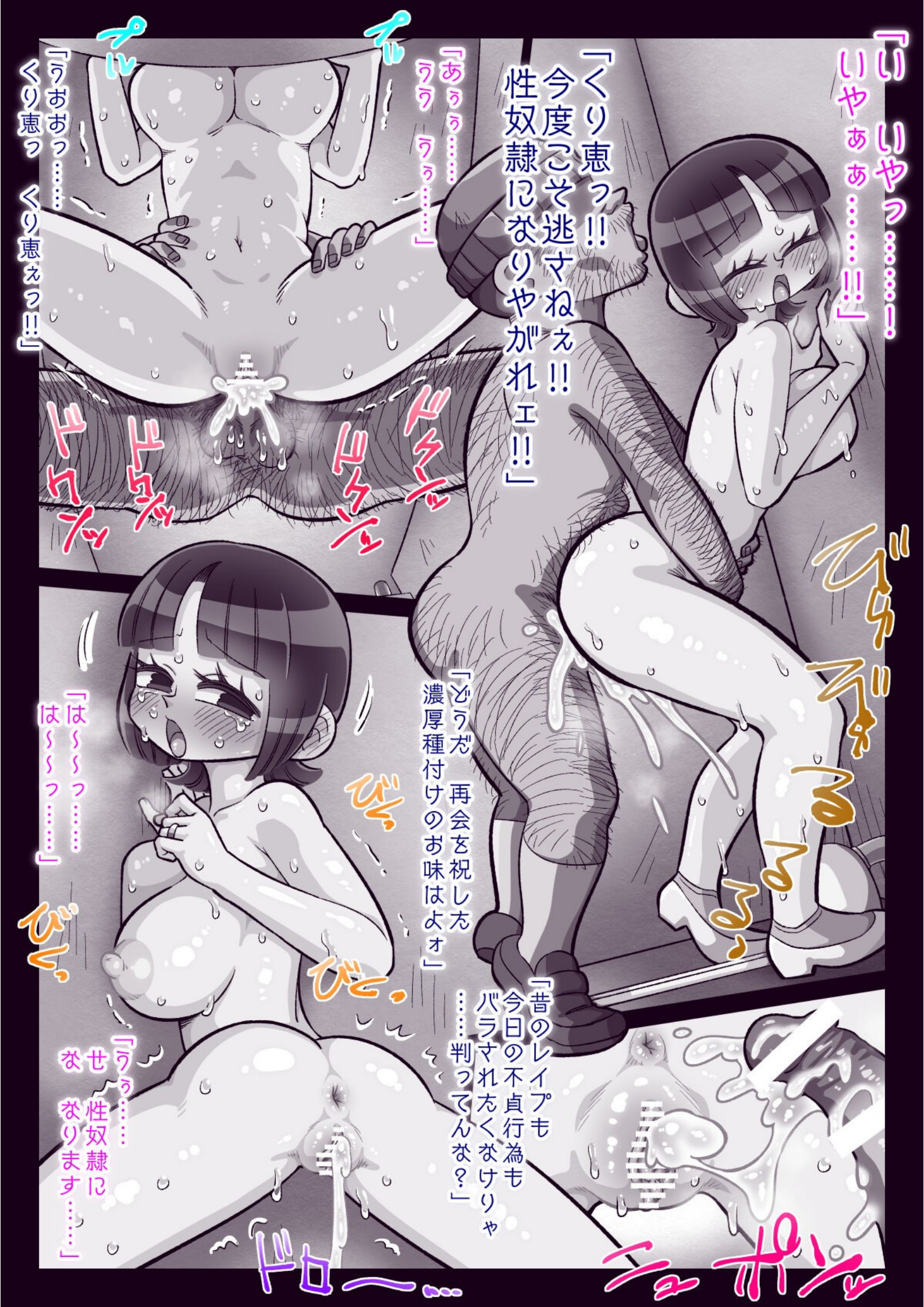

「孕め孕め孕めぇっ!!
知らねぇ男の精子で
受精して人生終われ!!」
「むぐぐぐぐぐっ!!」
ドピュッ
ドビュッ
びゅるるるっ!!
学生証
氏名
誕生日
入学日
「くり恵ちゃんねぇ……
クリトリスみてぇな
エロい名前してるじゃねぇか」
「よし 今日からお前は
俺の性奴隷だからな!」
「名前も住所も
全部バレてるんだ
逃げようなんて
思うなよ?」
「あ……
いや……
いやぁ……」
「たすけて……
だれか……」


十年後―
「……」
「!!」
「なつかしいなァ
俺の性奴隷にする
って言ったのに
直後に引っ越し
やがってよぉ」
「ずっと会いたいと
思ってたぜぇ……」
「おい……
お前 くり恵
じゃねぇか?」
「やっぱり
そうだ!
くり恵だ!」
「……?」
「忘れちまったか?
まぁ仕方がねぇか
俺もだいぶ
落ちぶれた
からなぁ……」
「ほら お前を
レイプした……」
「あの時の
男だよ!」
トスンッ


「そうそうコレだよコレ！」
「このデッケェパイオツを揉みたくてたまらなかったんだよ！」
「……」
「十年の間に勝手に人妻になりやがって……」
「夫はあの事を知ってんのか？」
もみ
もみ
もみ
「！」
「言ってねぇんだろ？」
「言えるワケねぇよなァ処女をこんな奴に捧げたなんて……」
ぷにん
むにゅ
すりすりん!!
「バラされたくなけりゃ判ってるよな……？」
「旦那の事を愛してるんだろ？嫌われたくねぇよなァ……？」
すりすり


「十年経っても相変わらず良い身体してるじゃねぇか」
「ホラ　とっとと尻を突き出しやがれあの日の続きをするんだよ！」
「オイオイお前は背が高いんだから腰を屈めなきゃ入れられねぇだろ」
「チンポ突っ込めるように腰を落とせ！」
「そうそうそうやって穴の位置を合わせるんだよ」
「……」
「あ～……たまんねぇなァ……！ネットリしてて程よくキツくてエロいマンコだぜ！」
ぬぷぷぷぅ
プル
プル

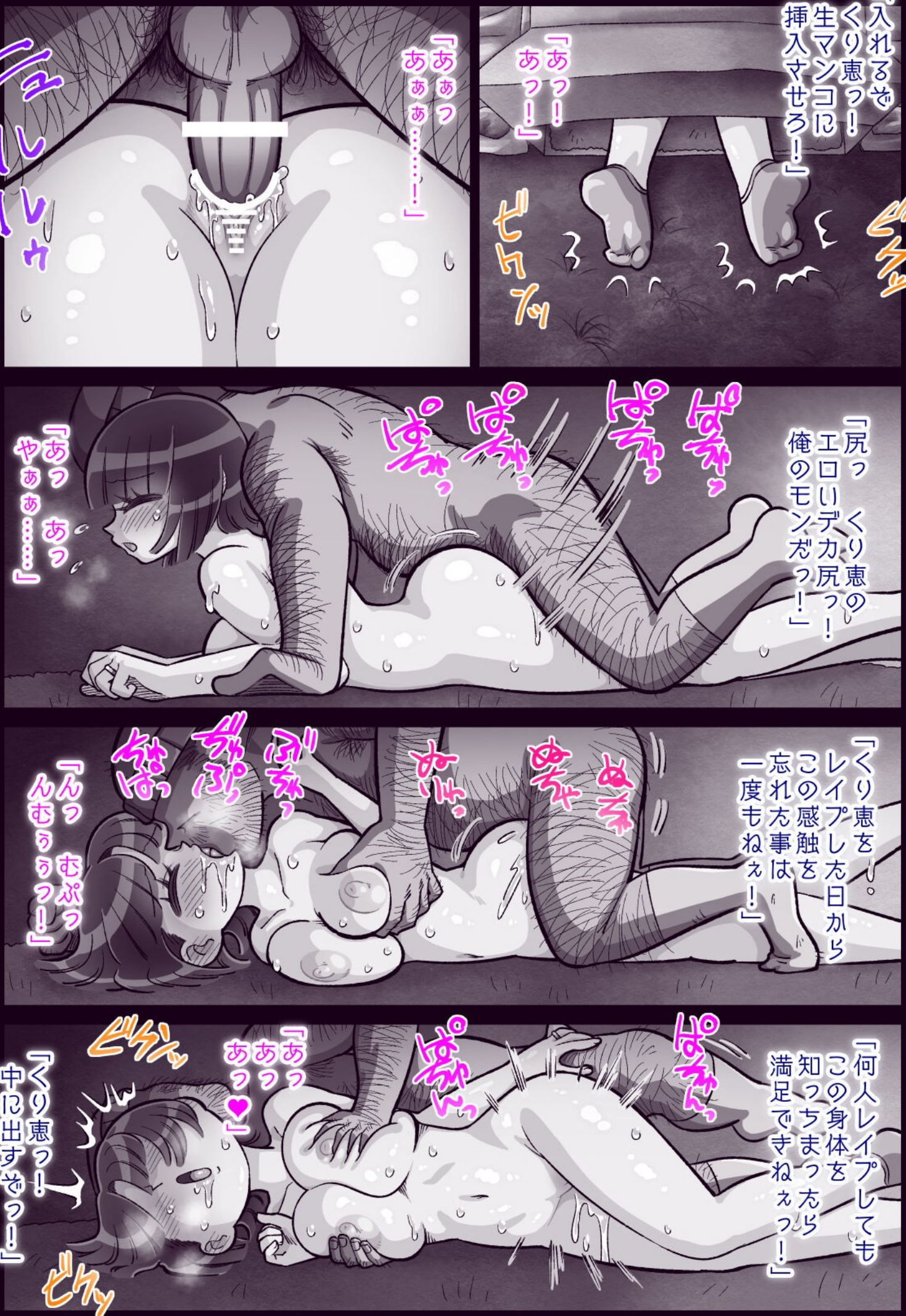

「うっ……うぅ……」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「色んな女をレイプしたがやっぱりくり恵が一番良いぜ！」
「はぁっ……はぁっ……」
プルン
ぷるっ
ぬちっ
「人妻にしちゃだいぶキツいがマてはは旦那のチンポが短小だな？」
「あっ……うっ……」
「毎晩ちゃんと旦那に喜ばせてもらってんのか？」
むぎゅっ
むにゅっ
もみっ
「こんな良い身体を持て余してちゃいけねぇなァ」
「や　やめて……」
「今日から俺がくり恵を女にしてやるぜェ」
「ザーメンを中にぶちまけて子宮を温めてやるからよぉ！」
ぬるっ
にゅぷ
ぬちゃ
「あっ！いやっ！」
「こんな所まで届いた事ねぇんだろ？マンコの形でバレバレだぜ？」
もみっ
にゅぷ
ぬちゃ


「いやっ……！
いやぁぁ……!!」
「くり恵っ!!
今度こそ逃さねぇ!!
性奴隷になりやがれェ!!」
「あぁぁ……
うぅ　うぅ……」
プル
プル
「うおおっ……
くり恵っ　くり恵ぇっ!!」
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
びくっ
びくっ
「昔のレイプも
今日の不貞行為も
バラされたくなけりゃ
……判ってんな？」
「どうだ　再会を祝した
濃厚種付けのお味はよォ」
「は～～っ……
は～～っ……」
「うぅ……
性奴隷に
なります……」
ドロ～…
ニュポン


ごめん
今日も帰れない…
料理仕舞っておいて
20:37
リョーカイ！
20:45 既読
「はー……」
ビー
チラ
「時間通りだな
来てくれて
うれしいぜ」
「……」
「俺と十年ぶりに
セックスしてから
どうしてた？」
「思い出して
ワレメこすり回して
たんじゃねぇか？」
「何ぼヤっと立ってんだ
早く素っ裸になるんだよ」
「……」
「今夜は俺の
マイホームで思う存分
楽しませてやるぜ」
「おっ　パンティが丸見えに
なった瞬間にエロいニオイ
漂ってきたぜ」
すりすり
「こりゃマンコも
出来上がってる
やがるな？」

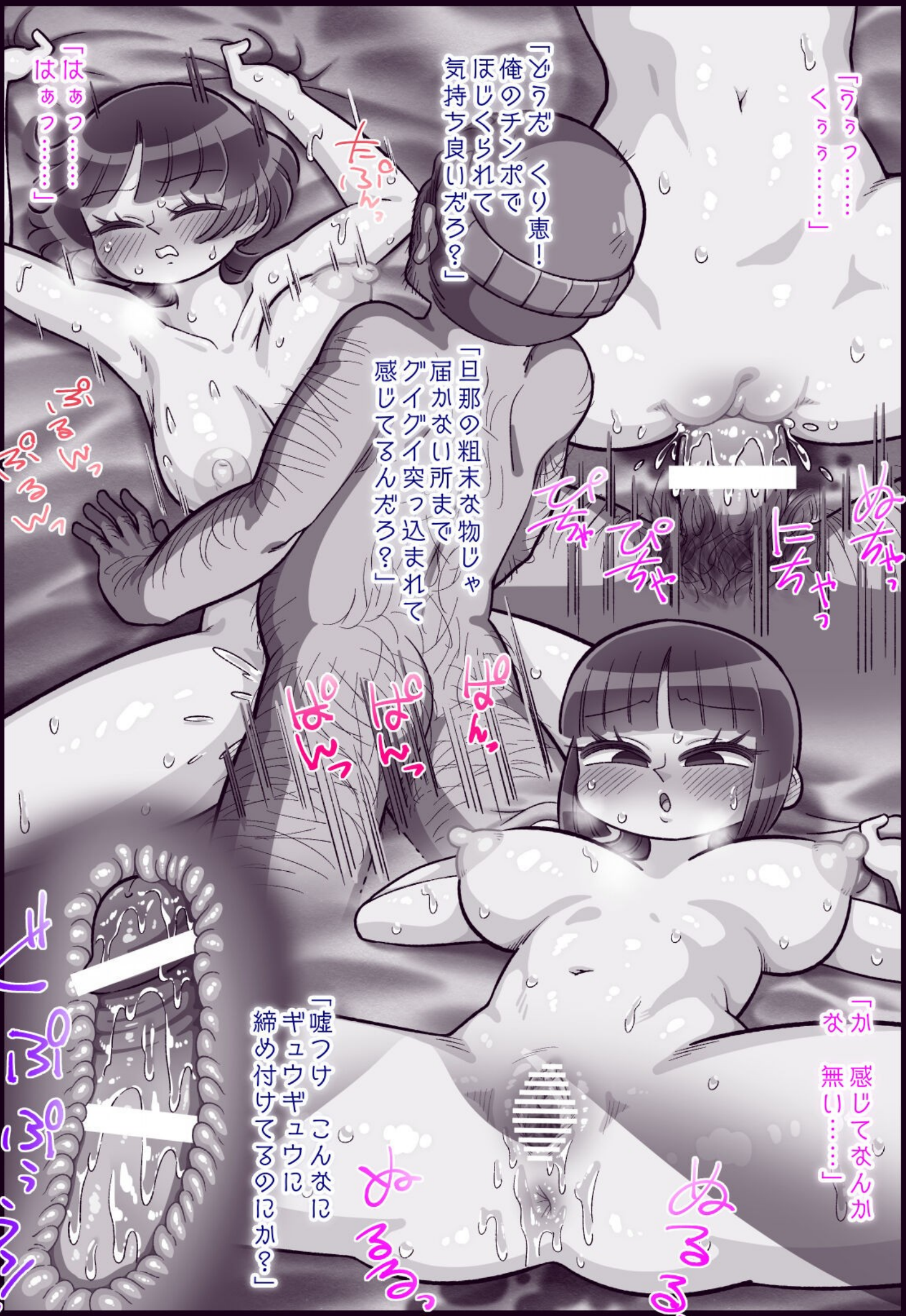

「やっぱりトロトロになってやがったなァ」
ぴゃ
にちゃ
ぬぬ
ちゃぷ
ちゃぷ
「うっ あっ あぅっ……」
「ビッショリ濡れたエロマンコがチンポからザーメン搾り取る動きしてるぜぇ！」
「おらっ 潮吹け！敏感マンコ痙攣させながらエロ汁吹き出せ！」
「い いやっ…… やだっ やっ……」
びくんっ
「あぁぁっ！だ だめっ だめぇっ！」
「へへ 勃起が止まらねぇよ 今度は俺が楽しませてもらう番だな……？」
「はぁ はぁ はぁ……」
ハァハァ
ハァハァ
しゃあお～♪
イ゛ッヤァアア!!

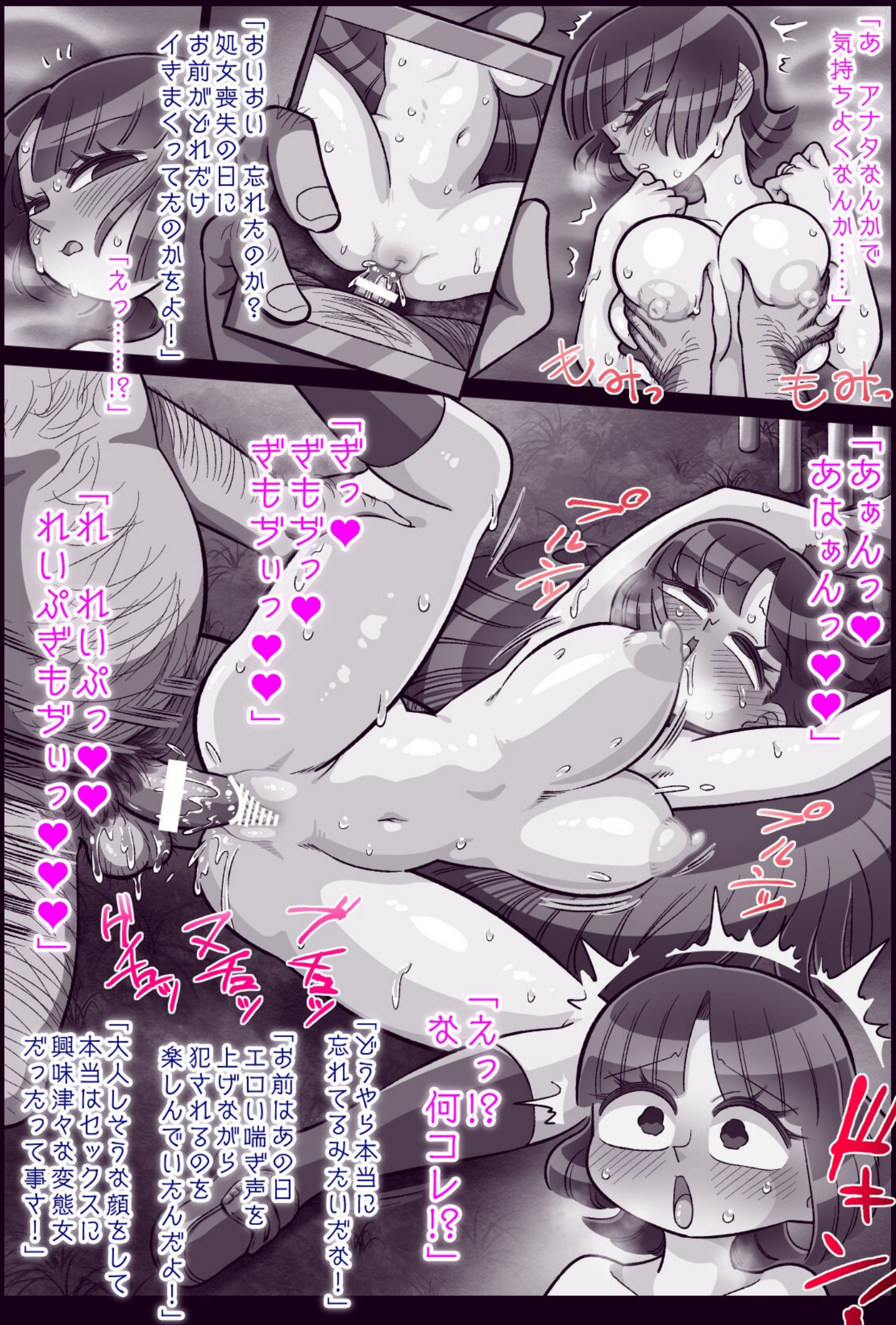

「とっとと中に入りやがれ！案外気に入るかもしれねぇだろ？」
「うぅ……」
「ちょっと小せえからくり恵だと足がはみ出るかもしれねぇけど……まぁ　気にすんな！」
「うっ……！　くっ　臭い……！」
「くり恵ちゃぁ～ん！俺の愛の巣へようこそぉ！」
「や　やだっ……！　狭いぃ……！」
モゾ　モゾ
「んうぅっ……！　んぷっ　うぅっ！」
ブチュッ
ヂュルッ
ブチュッ
「くり恵っ！　くり恵ぇっ！　お前は俺の女だっ！　一生俺の物なんだよっ！」
めりっ
にゅるっ
「あうっ　はうぅ……！」

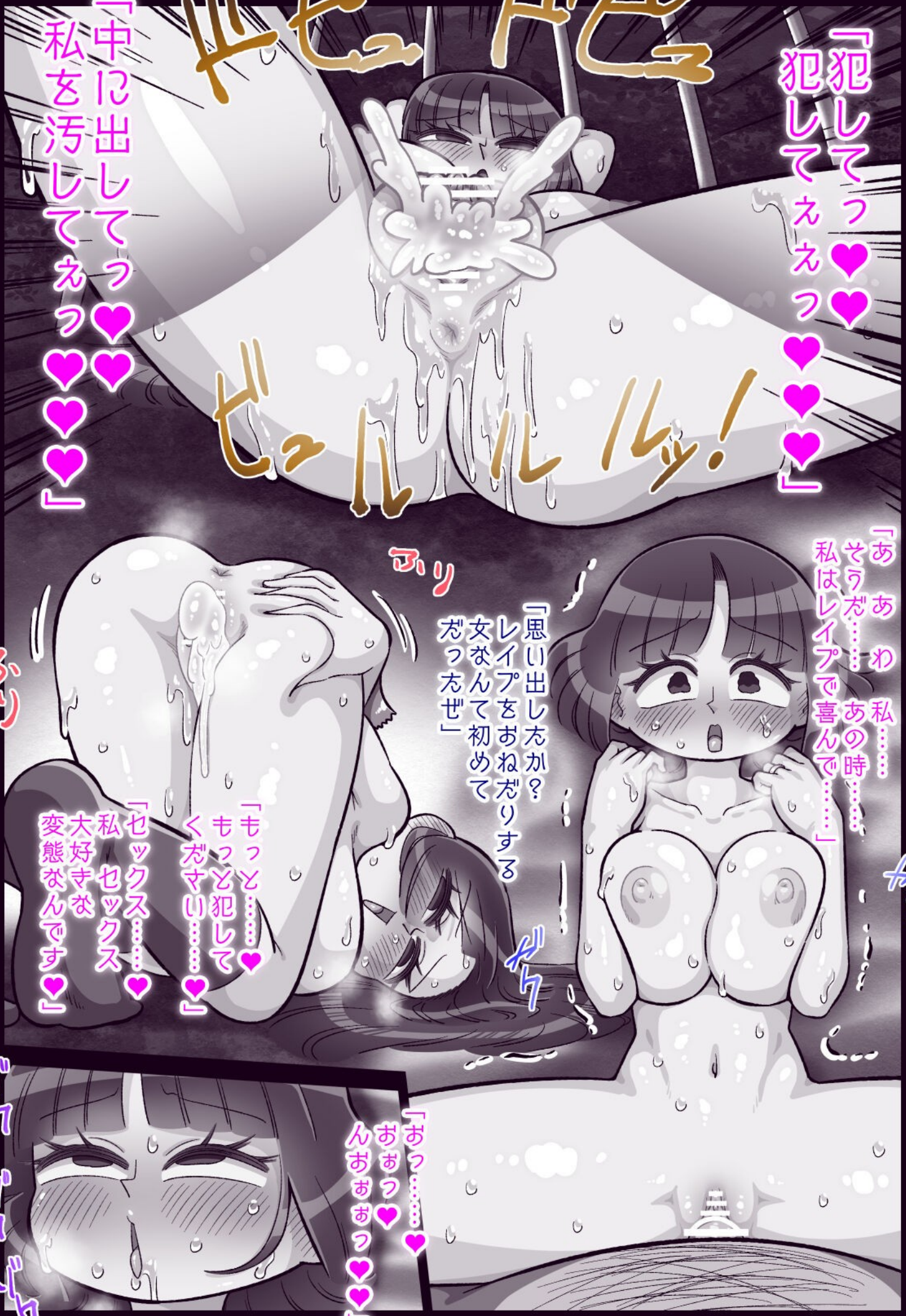

「入れるぞ くり恵っ！ 生マンコに 挿入マせろ！」
「あっ！ あっ！」
ビクッ
ビクン
「あぁっ あぁぁ……！」
ニュルルゥ
「尻っ くり恵の エロいデカ尻っ！ 俺のモンだっ！」
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
「あっ あっ やぁぁ……」
「くり恵を レイプした日から この感触を 忘れた事は 一度もねぇ！」
ぬちゃ
ぬちゃ
ぷりっ
ぷりっ
ぷりっ
「んっ むぷっ んむぅぅっ！」
「何人レイプしても この身体を 知っちまったら 満足できねぇっ！」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「あっ あっ あっ♥」
ビクンッ
「くり恵っ！ 中に出すぞっ！」
どくっ

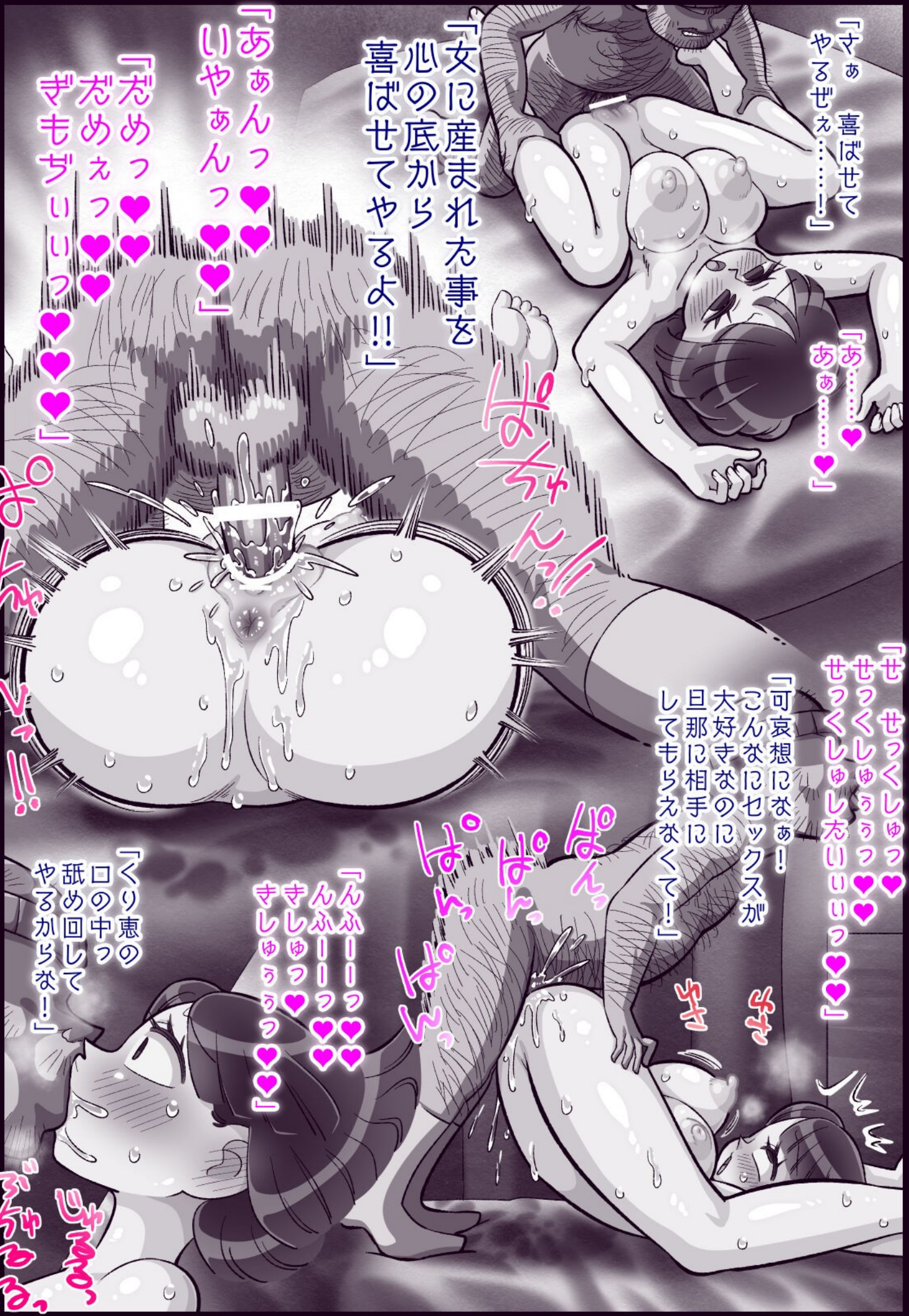

「俺に犯されながらイキやがれっ!!」
「あぁっ♥あぁぁあっ♥♥」
ズンズンズン
「あっ……♥あぁっ……♥」
ブルッ
ビュー
ビュッビュッ
どーん!!
「イったな？俺とのセックスでくり恵はイったんだ」
「はぁっ はぁっ 違う……違うの……」
「違うだァ!? 認めるまで今夜は家に帰すねぇからな!!」
「いやっ！やめてっ！」
「ヤだっ！ヤだぁ……！いやぁ……!!」
「フーッフーッくり恵ぇ……」
メロン♪
「あんっ♥あんっ……♥」


「へぇ ここがくり恵と旦那さんの寝室ねぇ……」
「綺麗な部屋でうらやましいぜ」
「……」
「ワリいな 押しかけちまってでも勃起が収まらなくて我慢が出来なくてよォ」
「お お願い…… 家には来ないで…… 主人に知られたら……」
「あなたと会ってる所を誰かに見られたらこ 困るの……」
「なら旦那が帰って来る前に早く済ませちまおうぜ」
「うぅ……」
「あっ…… やっ……」
ふにゅん
もみ…
「俺の事を旦那だと思ってあのベッドで楽しんでくれよなァ！」


「うぅっ……くぅぅ……」
「どうだ くり恵！俺のチンポでほじくられて気持ち良いだろ？」
「はぁっ……はぁっ……」
「旦那の粗末な物じゃ届かない所までグイグイ突っ込まれて感じてるんだろ？」
「か感じてなんか無い……」
「嘘つけ こんなにギュウギュウに締め付けてるのにか？」


「あ　アナタなんかで気持ちよくなんか……」
もみっ
もみっ
「おいおい　忘れたのか？処女喪失の日にお前がどれだけイきまくってたのかをよ！」
「えっ……!?」
「あぁんっ❤あはぁんっ❤❤」
プルン
「ぎっ❤ぎもぢっ❤ぎもぢいっ❤❤」
「れ　れいぷっ❤❤れいぷぎもぢいっ❤❤❤」
プルン
ヤモッ
メチョッ
ヤメロッ
「えっ!?何コレ!?」
「どうやら本当に忘れてるみたいだな！」
「お前はあの日エロい喘ぎ声を上げながら犯されるのを楽しんでいたんだよ！」
「大人しそうな顔をして本当はセックスに興味津々な変態女だったって事さ！」
ドキン！

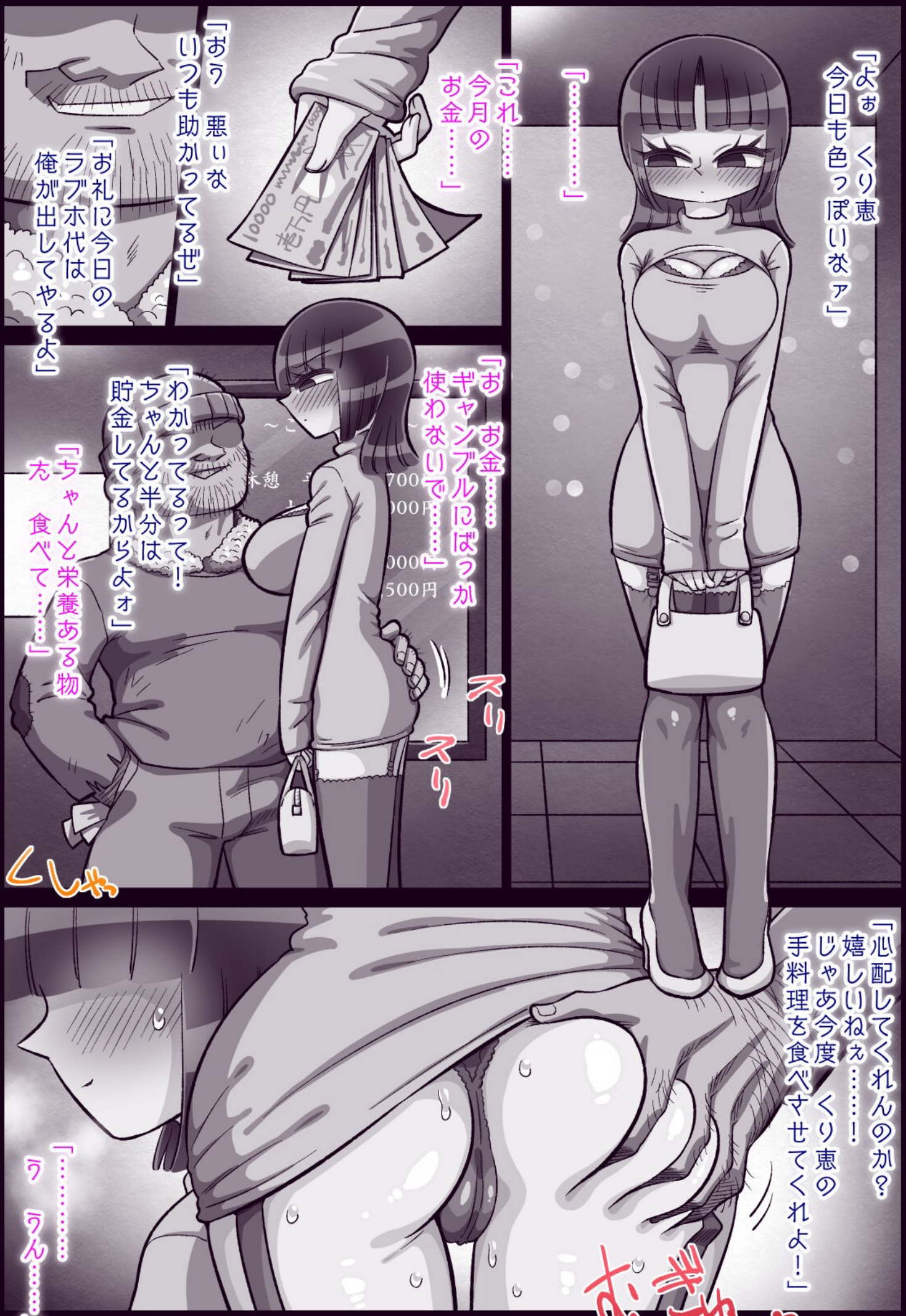

「犯してっ♥♥犯してぇぇっ♥♥♥♥」
「中に出してっ♥♥私を汚してぇっ♥♥♥♥」
ビュルルルッ！
「あ あわ 私……そうだ……あの時……私はレイプで喜んで……」
「思い出したか？レイプをおねだりする女なんて初めてだったぜ」
ぶりっ
ぶりっ
「もっと……♥もっと犯してください……♥」
「セックス……♥私セックス大好きな変態なんです♥」
ガク
ガク
ガク
「おっ……♥おぉっ♥んおぉおっ♥♥」
ゾクゾクゾク


「さぁ 喜ばせてやるぜぇ……！」
「あ……♥ あぁ……♥」
「女に産まれた事を心の底から喜ばせてやるよ!!」
「あぁんっ♥♥いやぁんっ♥♥」
「だめっ♥♥だめぇっ♥♥ぎもぢいいっ♥♥♥」
ぱちゅんっ!!
ぱちゅんっ!!
「せ せっくしゅっ♥ せっくしゅぅぅっ♥♥ せっくしゅし たいいいっ♥♥」
「可哀想になぁ！ こんなにセックスが大好きなのに旦那に相手にしてもらえなくて！」
ぱんっ ぱんっ ぱんっ
「んふーーっ♥♥ んふーーっ♥♥ きしゅっ♥ きしゅぅぅっ♥♥」
「くり恵の口の中っ舐め回してやるからな！」
じゅるっ ぶちゅるるっ


「もう自分を騙す必要なんてねぇからな！」
「セックス好きとして産まれた事は何も悪い事じゃねぇんだからよ!!」
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
ぱちゅんっ
「ぎもちっ♥ぎもちっ♥ちんぽっ♥ちんぽこっ♥」
ぷるんっ！
ぷるんっ！
「ちんぽこっ♥きんたまっ♥おとこっ♥すきっ♥」
「は、恥ずかしく無いっ？せ、セックス好きなのっ悪いことじゃ、無いっ!?」
たぷっ
たぷっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
「悪い事なんかねぇんだよ!!気持ちよくなりてぇんだろ!?」
「な、なりたいっ♥気持ちよくっ♥なりたいっ♥」
にちゃ
ぴちゃ
ぬちゃ
ぐちゃ


どぱっ どぱっ
どぱぁぁ！
「いやらしいくり恵のコトっ♥♥♥」
プルルッ♥
ぴゅるるっ♥
「いっぱい気持ちよくしてぇぇぇっ♥♥♥」
びゅるるるっ
プシャアッ
びゅっ！
びゅっ！


「ふーっ♥ ふーっ♥ ちゅぱっ♥ ちゅぱっ♥」
ちゅぱっ
ちゅろっ
ぢゅるっ
「ちんぽっ♥ ちんぽぉっ♥」
どろぉ
「ちんぽぉぉっ♥♥ おいしいよぉぉっ♥♥」
「どうだったくり恵 もう俺とのセックスが嫌だなんて思わないよな？」
「セックス……♥ セックス好きぃ……♥」
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
「可愛いくり恵の為に これからもたくさん セックスしてやるからな？」
「嬉しい……♥ 嬉しいよぉ……♥」
「そうだ 昔のくり恵みたいに 髪を伸ばせよ その方が可愛いぜ」
「はい……♥ 伸ばします……♥ アナタ好みの女に……なります……♥♥」
ゴポッ


「よぉ くり恵 今日も色っぽいなァ」
「……」
「これ……今月のお金……」
「おう 悪いな いつも助かってるぜ」
「お礼に今日のラブホ代は俺が出してやるよ」
「お お金……ギャンブルにばっか使わないで……」
「わかってるって！ ちゃんと半分は貯金してるからよォ」
「ちゃんと栄養ある物 た 食べて……」
スリ
スリ
くしゃ
「心配してくれんのか？ 嬉しいねぇ……！ じゃあ今度 くり恵の手料理を食べさせてくれよ！」
「……う うん……」
おぎゃっ♥


「お料理……がんばろ　ね……♥」
終 オワリ